天山山脈トムール峰 登山隊報告書 一九九二

天山登攀倶楽部

'92・天山山脈トムール峰
登山隊報告書

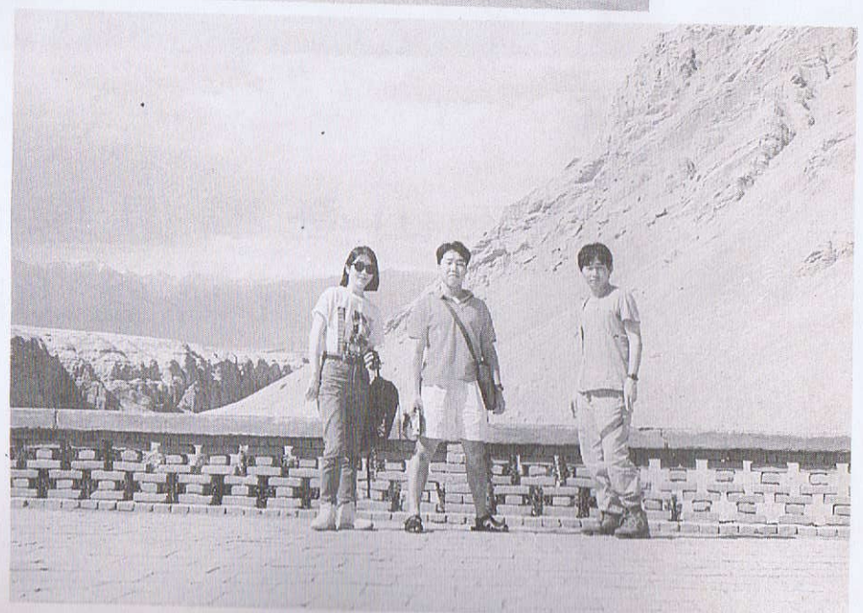
天山登攀倶楽部
トムール峰登山隊

'92・天山山脈トムール峰
登山隊報告書

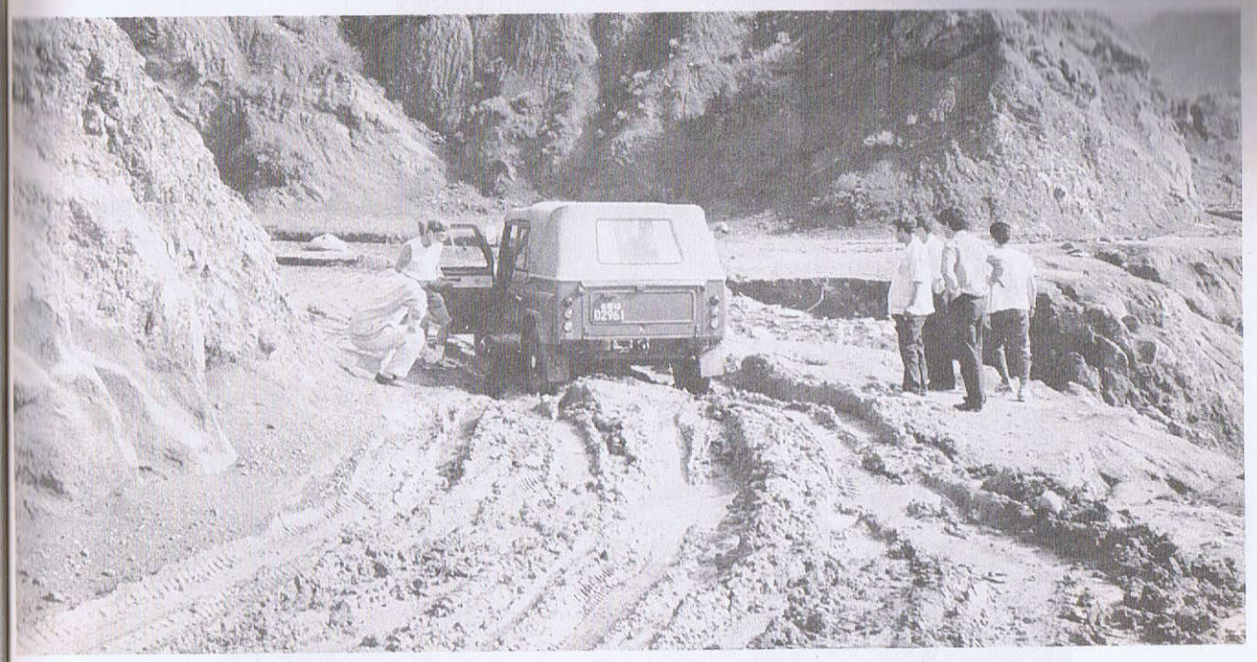
天山登攀倶楽部
トムール峰登山隊

6月23日、ウルムチに到着。
ここから先はコンピュータ
の故障で飛行機が飛ばない。

6月24日、登山協
会のはからいでト
ルファンを観光。



トルファンのベゼクリク
千仏堂。乾燥しているが
気温は40度を越える。



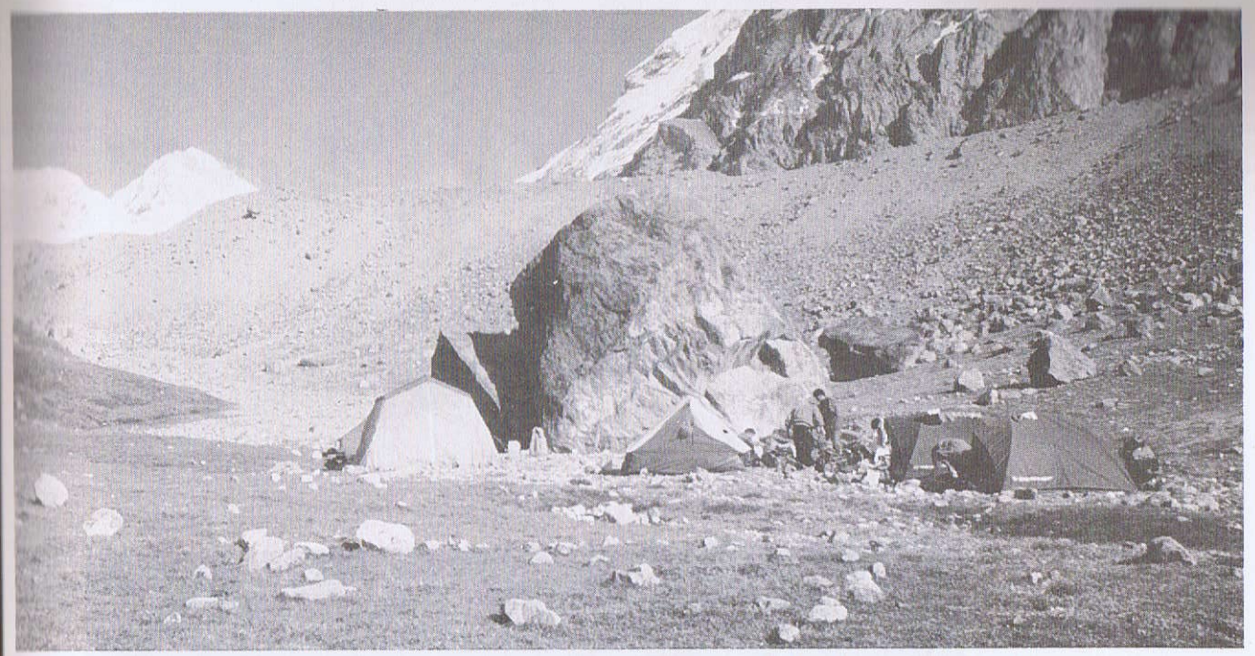
6月28日、アクスからタカラクへむかう。
途中、道が悪く、ぬかるみにはまること
もしばしばあった。

2,100mの草原にて。ここでも
また、予定外の停滞となる。

6月29日、キャラバン開始。
道中出会った遊牧民の家。

2,600m付近の
針葉樹林帯。

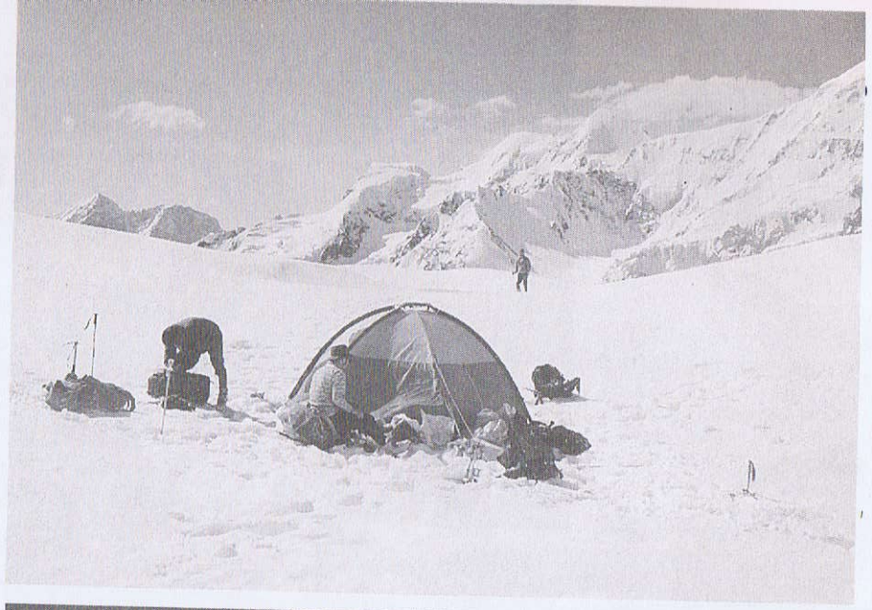
7月2日、モレーン地帯を行く。
馬方がストライキをおこしたた
ために、ビバークを強いられる。



7月3日、3,900m地点にBC設営。右側のダンロップが隊員用テント。

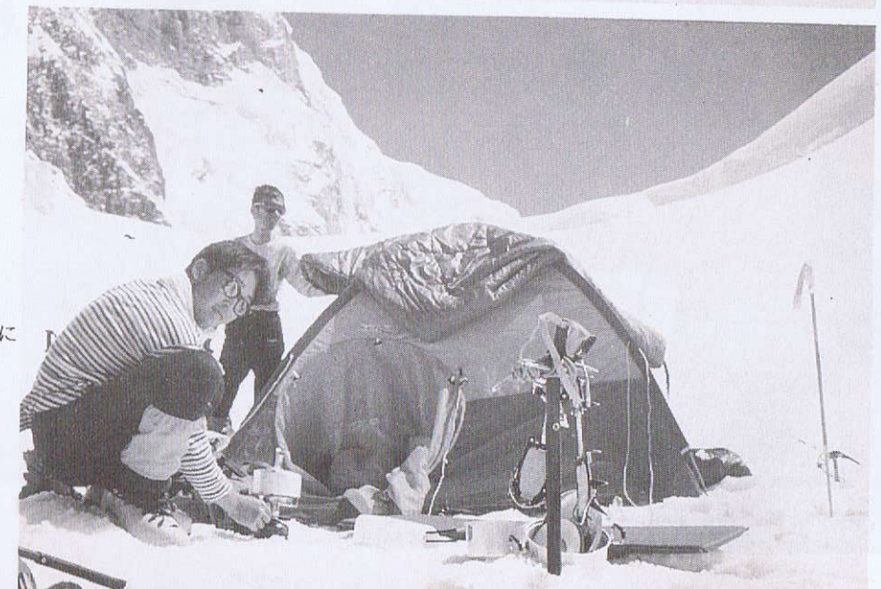
アイスフォール帯基部の4,350mをデポ地とする(7/6)。

5日間にわたる苦闘の末、アイスフォール帯を突破(7/10)



4,600mの雪原上に
Ｃ１を設営(7/11)。

Ｃ１－Ｃ２間の緩斜面を
登高する佐藤と稲田



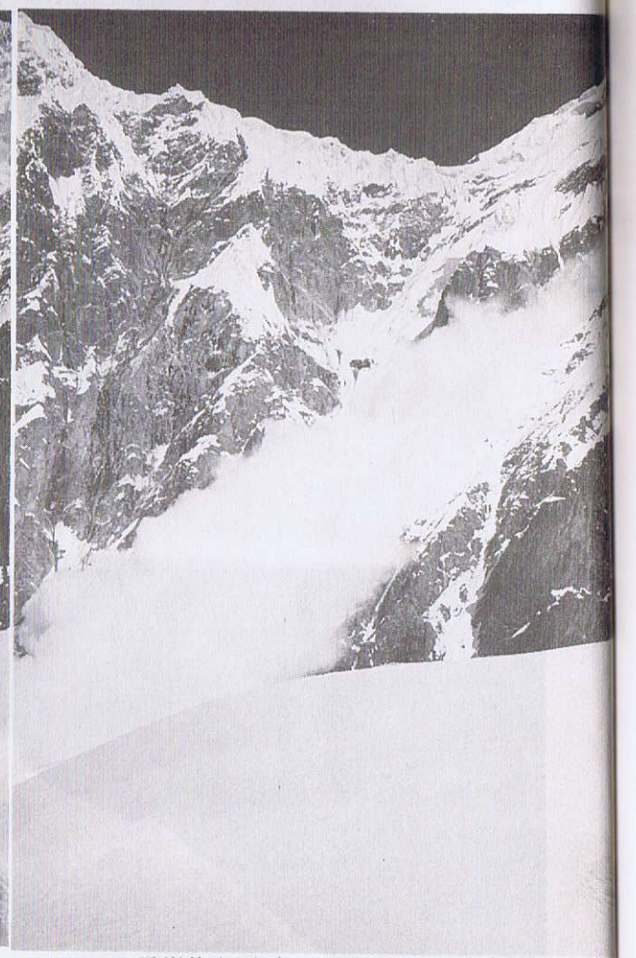
5,100mの雪壁基部に
Ｃ２を設営(7/13)。

核心部の雪壁をル
ート工作する吉見。

７月13日は5,500m、
翌14日は5,800mま
でルートを伸ばす。

結局、雪崩のため登山
活動を断念。5,800m
が最高到達地点となる。

7月15日、雪壁からの雪崩がＣ２を直撃、
シュラフ、ヤッケなどの高所装備を紛失。



雪崩後も再びＣ２へ上がり、雪壁を狙ったが
降雪による表層雪崩が頻発。登頂断念(7/21)

Ｃ１から見たトムール前衛峰。
7月27日、ＢＣを撤収、下山。

―目　次―

はじめに……吉田宣明……1
隊員紹介……3
行動日程表……7
中国概念図……8
Ⅰ．出発までの経緯……9
1．探査会によるアプローチ……9
2．天山踏査の会結成と登山隊派遣……9
3．遭難、天山踏査の会解散……10
4．再挑戦の決意……10
5．計画準備と組織づくり……11
6．隊員の脱落と出発……12
天山とトムール峰……13
Ⅱ．行動記録……14
各隊員の行動表……39
Ⅲ．担当報告……42
食糧……相木美香・稲田　俊……42
装備……吉見敦司……46
輸送……佐藤修史・田村康一……50
渉外……田村康一……52
医療……吉田宣明……53
会計……吉田宣明……55
Ⅳ．隊員エッセイ……57
ショート・エッセイ6編……真庭博之……57
クライマーになれなかった男……稲田　俊……60
トムールへのこだわり……吉見敦司……62
ＢＣ日記より……相木美香……63
「山登りと喫煙」、否「喫煙とわたし」か……佐藤修史……65
次回遠征にむけて……田村康一……67
遠征を終えて……吉田宣明……70
協力者名簿……72
編集後記……73

はじめに

1992年６～７月、私たちは中華人民共和国・新疆ウイグル自治区の天山山脈最高峰、トムール（7,345m）に挑みました。

1990年夏の、横浜市立大学天山踏査の会によるトムール峰登山隊の経験を経て、雪崩により遭難した３人の遺志を継ぎ、「天山登攀倶楽部」ができあがりました。

中国新疆登山協会への登山許可申請にはじまり、組織の確立、資料の収集、登攀計画の検討、訓練合宿の実施などの準備を進め、その間、各方面より様々なご協力を賜ってまいりました。

殊に、登攀計画に関しては、前回の経験より得たトムール峰の危険度の認識を再重点に置き、ルート計画、登攀日程、装備計画などの練り直しを何度もおこなってきました。

現地入りしてからは、入山に至るまで様々なトラブルがあり、登山活動を開始したのは予定を大幅に過ぎた７月５日となりました。トムールの状況は、計画段階で考えていたものとは程遠く、氷河の速い動きや、午後からの気温上昇による短い行動時間に悩まされながらの登山活動が続きました。

それでも、Ｃ１、Ｃ２とルートをのばし、前回の遭難事故現場である5,800m地点まで到達しました。しかし、７月15日、Ｃ２を吹き飛ばした氷河崩壊に伴う雪崩と、その後、連日のように続いた降雪のため、私たちはトムール峰の登頂を断念するに至ったのです。

トムール峰登攀の成否は、いかにして雪崩を避けるか、どれだけスピーディーに危険箇所を通過できるかにかかっていると考え、計画、行動には細心の注意を払って登山活動を進めてきましたが、氷河の崩壊のスケールは、私たちの想像をはるかに越えていました。

今回の山行記録を中心に、「'92・天山山脈トムール峰登山隊報告書」を作成致しました。ご支援、ご協力くださいました皆様にご一読いただき、忌憚のないご意見、ご批判を賜り、今後の活動の指針とさせていただきたく存じます。

1993年１月

登山隊隊長　吉田　宣明

隊員紹介

吉田宣明(27)　1．隊長・渉外・会計・医療

2．横浜市立大学山岳部ＯＢ　　会社員

3．大学時代は岩登りに青春を賭け、卒業して５年たった今でも、スリムな身体での美しいクライミングには定評がある。しかし本番では、Ｃ１付近のクレバスで負傷して、ＢＣの寝たきり老人と化してしまった。いわずとしれたやかまし親父で、テント内で水を一滴でもこぼそうものなら、ここぞとばかりに怒鳴りちらす。隊員Ｍがこの遠征でゲッソリとやせたのは、吉田隊長の不当な圧力のためであると噂されている。

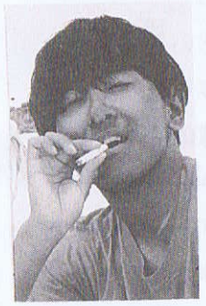
田村康一(25)　1．副隊長・渉外・輸送

2．横浜市立大学探検部ＯＢ　　会社員

3．医療係が日焼け止めクリームを忘れたために、彼は耳の日焼けに苦しんだ。変色して黒ずんだ耳を鏡に写しつつ、本人は半ば本気で耳がなくなってしまうのではないかと心配していたようだ。この耳が痛んで寝返りがうてないと、なぜか彼はいびきをかく。しかも格別にうるさい。このいびきのせいで、同じテントの住人が寝不足になったのはいうまでもない。隊員Ｍが弱ってしまった原因は、彼にあるのかもしれない。

佐藤修史(24)　1．輸送

2．横浜市立大学探検部ＯＢ　　無職



3．彼のお下劣なギャグ、とくに糞尿やゲロなどの汚いものの話は天下一品の切れ味だ。この点においては、何者をも寄せつけない強さをみせる。大学４年時から山とは少々縁遠い生活をしていた彼が、天山にきてこれ程までに活躍（ルート工作等）するとは誰も予想していなかった。訓練合宿の谷川岳では、十歩と歩かぬうちにゲロを吐いていたという話だが、それは彼の仮の姿っだったのだろうか。

1．担当　2．所属　3．エピソード

吉見敦司(21)　1．装備

2．横浜市立大学山岳部・探検部　文理学部４年(休学中)

3．人呼んで「カリブの怪人」。ブラジル育ちの黒い男である。登山活動中、彼だけは日焼けに苦しむことはないだろうといわれていたが、そんなことはなかった。彼は高所登山における日焼けの恐ろしさを身をもって証明してくれた。焼けてぼろぼろになった顔の皮をむきつつ、「こんなになったのは初めてだ」と一言。さらに、帰国して１ヵ月以上たっても色が落ちないと嘆いていたが、それは地だから落ちないのだよ。

稲田　俊(20)　1．食糧

2．横浜市立大学探検部・山岳部　文理学部２年

3．彼は物事に驚いたとき、「なんて○○なんだぁ、しかも××だぁ」というフレーズをもってその感動を表現する。これは他の隊員および中国側の通訳にまでまねされ、ＢＣの流行語となった。出発の際、見送りにくるはずだったいとしのＫ子嬢に裏切られ、がっくりと肩を落していた彼だったが、中国側スタッフから童男子(トンナンジー：0貞)と呼ばれ、白酒の一気飲みをやらされてもへこたれない丈夫な隊員として活躍した。

真庭博之(23)　1．記録

2．横浜市立大学ワンダーフォーゲル部・写真部　商学部５年目

3．ギャンブル好きの彼は競馬も好きだが、どうやら馬という生き物自体が好きなようだ。写真にしても、山よりも馬のほうを多く撮っていたほどだ。帰りのキャラバンでは仮病(？)を使って念願の馬に乗り、ご満悦の様子が「これ以上笑えません」という彼の表情からうかがえた。生への執着心は人一倍強く、雪崩の爆風に襲われたとき、最後に駆けだしたはずの彼は、他の２人をゴボウ抜きしてトップに躍りでたそうな。

ＢＣ隊員・中国側スタッフ

相木美香(22)　1．ＢＣマネージャー

2．横浜市立大学文理学部４年

3．前年のスペイン留学中に、自ら志願して隊員となる。ＢＣまでの道のりは、ほとんど山の経験のなかった彼女にとっては過酷なもので、キャラバン４日目にはモレーン地帯で疲労凍死寸前の目にあった。ＢＣでは自慢の料理の腕をふるい、味のほうはなかなか好評だったようである。一見おとなしそうな顔とは裏腹の毒舌を駆使し、この隊員紹介の原稿も担当した。おかげで学内をはじめ、周囲に敵が多いのがたまに傷である。

胡　峰岭(34)　1．連絡官

2．新疆登山協会監督　シボ族

3．彼の胸板の厚さは、ボディビルダーかキングコングかといったところだろう。これまでもさまざまな遠征隊に参加し、登山のキャリアは豊富である。７年ほど前、昆崙山脈のムスターグ峰に初登頂した際に両足先に凍傷を負い、甲の半分から先を切断してしまったが、根っからの山好きは何ら変わっていないそうだ。登山隊の仕事がないときは、ウルムチの飲み屋でシシカバブーを焼いているという。

郝　震宏(24)　1．通訳

2．新疆登山協会通訳　漢族

3．千葉の舘山で研修生として日本語を修行し、今は本職(獣医)そっちのけで通訳として稼ぎをあげている。日本に行く前には、だれもが羨む美人と婚約して、帰国後に即結婚するという早業をみせた。まだ新婚数ヵ月だというのに、好きでもない山登りに連れていかれ、全く彼もついていないものである。今回の登山で唯一良かったことは、気になりはじめた贅肉が少しとれて、男前があがった点であろうか。

年齢、所属は1992年７月当時

蒋　解放(？)　１．コック

２．アクス体育学校教師　　漢族

３．この世のものだけではなく、地獄の住人まで呼び起こしてしまうのではないかと思われる大声の持ち主で、我々はそのダミ声に慣れるのに数日を要した。人に歌を歌わせるのは好きだが、自分は照れ屋でなかなか人前で歌おうとしない。しかし、一人料理を作りながらの歌声は、毎日のようにＢＣに響き渡っていた。また、真夜中に獣のような声で英語の教科書を朗読していたこともあった。本職は国語の先生だそうである。

ケ ン ジ(32)　１．馬頭

２．キルギス族

３．吉田隊長の３年来の親友であり、２人のあいだには他の隊員が入り込めない世界が存在する。２年前は一介の馬方として働いていたが、今回は漢族の馬方の不手際から馬頭に昇格し、見事なルートファインディングとキャンプでのソツのない仕事ぶりで登山隊に貢献した。陽気で躍りがうまく、宴会のときにはキルギス族の歌と舞いを披露する。普段はタカラクで牧民として働いており、６人の子供たちのお父さんである。

馬 方 Ａ(？)　１．馬方

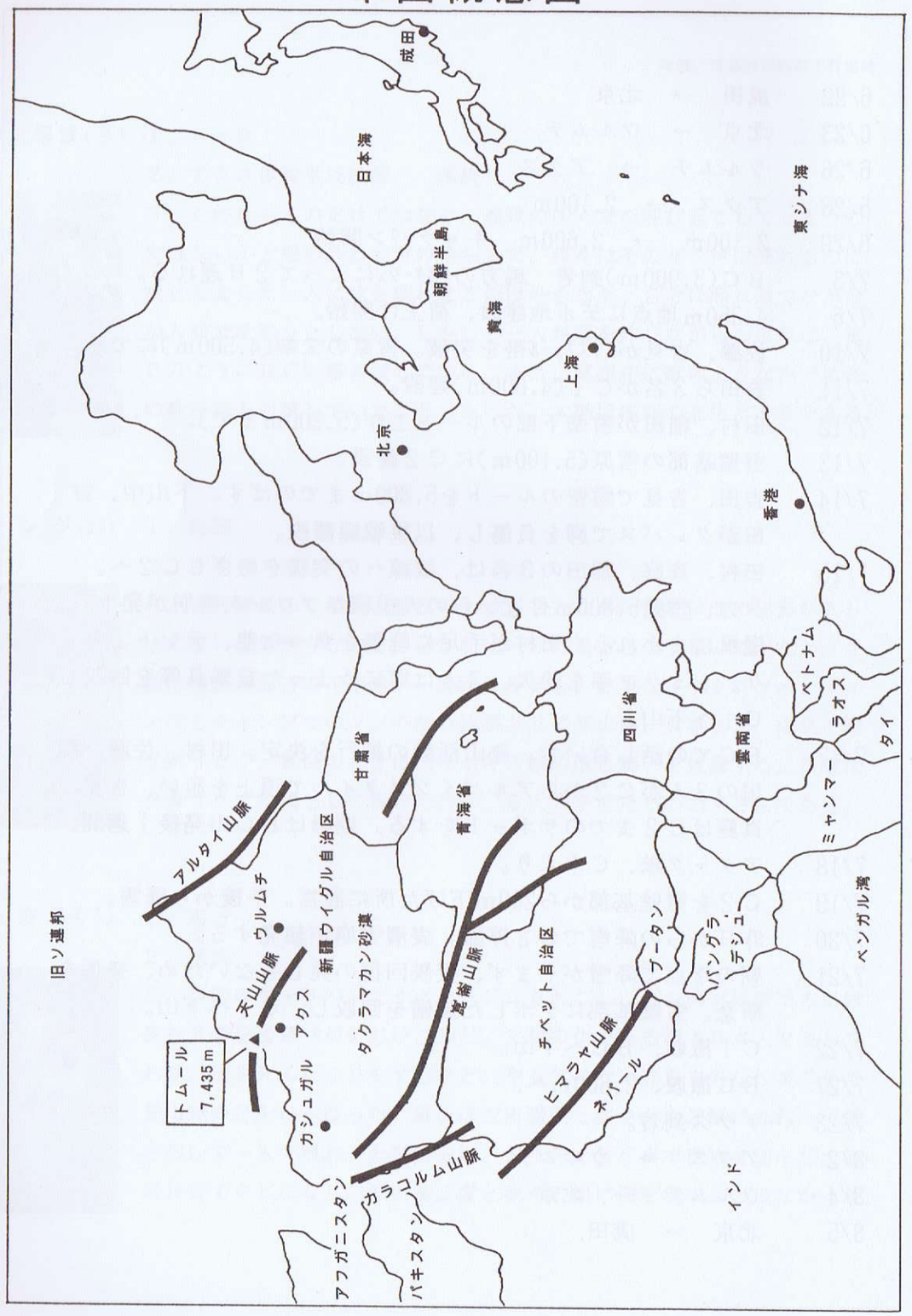
２．漢族

３．往路のキャラバンでサボタージュをおこし、モレーン地帯で吉田隊長ら３名を遭難寸前においこんだ。父親の仇である我々日本人を恨んでおり、道中死んだふりをするなど、やる気のない非協力的な仕事ぶりで登山隊の足をひっぱった。最後は吉田隊長と郝さんの逆鱗にふれ、「馬をおいて一人で帰れ」と怒鳴られ、ようやくＢＣまで荷物を運んだ。結局ＢＣでクビになり、その後二度と我々の前に姿を現すことはなかった。

行動日程表

6/22	成田　→　北京
6/23	北京　→　ウルムチ
6/26	ウルムチ　→　アクス
6/28	アクス　→　2,100m
6/29	2,100m　→　2,600m　キャラバン開始
7/3	ＢＣ(3,900m)到着　馬方のｻﾎﾞﾀｰｼﾞｭによって２日遅れる。
7/6	4,350m地点にデポ地建設、荷上げ開始。
7/10	佐藤、吉見がｱｲｽﾌｫｰﾙ帯を突破。雪原の末端(4,500m)にでる。
7/11	吉田ら３名がＣ１(4,600m)建設。
7/12	田村、稲田が雪壁下部のルート工作(5,300mまで)。
7/13	雪壁基部の雪原(5,100m)にＣ２建設。
7/14	吉田、吉見で雪壁のルートを5,800mまでのばす。下山中、吉田がクレバスで脚を負傷し、以後戦線離脱。
7/15	田村、真庭、稲田の３名は、稜線への突破をめざしＣ２へ。夕方、雪壁5,800m付近からの大規模なブロック雪崩が発生し、爆風にまかれる。田村が手足に軽傷を負った他、テント、ヤッケ、シュラフ等を紛失。３人は雪にうまった登攀具等を回収し、Ｃ１へ下山。
7/17	ＢＣでの話し合いで、登山活動の続行を決定。田村、佐藤、稲田の３人がＣ２からアルパインスタイルで頂上を狙い、吉見、真庭はＣ２までのサポートをする。期限はＢＣ出発後１週間。
7/18	アタック隊、Ｃ１入り。
7/19	Ｃ２を雪壁基部から200m下げた所に設営。午後から降雪。
7/20	昨日からの降雪でＣ２停滞。表層雪崩が頻発する。
7/21	朝の時点で降雪がやまず、天候回復の兆しもないため、登頂を断念。雪壁基部にデポした装備を回収し、Ｃ１へ下山。
7/22	Ｃ１撤収、ＢＣへ下山。
7/27	ＢＣ撤収、2,600mへ。
7/28	アクス到着。
8/2	アクス　→　ウルムチ
8/4	ウルムチ　→　北京
8/5	北京　→　成田

中国概念図



Ⅰ．出発までの経緯

1．探査会によるアプローチ

1959年、横浜市立大学探査会は、天山山脈遠征への最初のアプローチをおこなった。しかし当時は、ソ連、中国とも外国からの遠征隊をうけいれるような状況でなく、計画は陽の目をみずにおわった。以来20年以上にわたり、探査会のメンバーは天山遠征の夢をもちつづけてきた。

1980年、中国が国内の高峰の一部を解放したことがきっかけとなり、探査会は組織をたてなおして中国当局との接触を開始した。それから数年間、探査会はいくつかの遠征隊を企画し、1985年には長江源流の最高峰、グラタンドン（6,621m）の初登頂と、湖沼調査等を目的とする遠征隊の派遣寸前までこぎつけた。しかし、高所登山だけでなく、学術調査を標榜する探査会の姿勢がネックとなり、計画は京都大学に先をこされ、実現にはいたらなかった。

長江源流計画の挫折以来、探査会の中国へのアプローチはとだえていた。ところが1989年、それまで学術調査にかたくななこだわりをみせていた探査会は方針を転換し、登山隊一本で中国遠征を実現させようとい　うごきになった。そして探査会長老たちは、山岳部ＯＢと検討の末、天山山脈の主峰、トムール（7,435m）をはじめとする、いくつかの山を候補にえらび、中国登山協会（ＣＭＡ）にその旨を打診した。ＣＭＡからの返答は「トムールを許可する」ということであった。

2．天山踏査の会結成と登山隊派遣

ＣＭＡから仮許可をえた探査会は、あらたな組織づくりに着手した。７千メートルをこえる高峰の登山は、すでに中年から初老の域にたっしている探査会の主要メンバーでは荷がおもいと判断したためである。

1989年5月、探査会、山岳部、探検部を構成団体とする「横浜市立大学天山踏査の会」を結成し、同会が派遣する隊を「横浜市立大学天山トムール峰登山隊」とした。また、後援団体として横浜市立大学、同進交

会、横浜市が名をつらね、大学の60周年記念事業の一つとしても位置づけられることになった。

隊の構成は「登山隊」と「トレッキング隊」とし、登山隊は山岳部ＯＢと探検部現役により、トレッキング隊は探査会のメンバーが中心となった。登山隊隊長は山岳部ＯＢの西堀がつとめることになり、以後、西堀を中心に登山計画がねられ、1990年夏の実現にむけて、訓練合宿をかさねていった。

３．遭難、天山踏査の会解散

1990年7月、登山隊は中国に出発した。7月21日、ＢＣに到着すると、以後順調にルートをのばし、8月7日には核心部の雪壁をこえて、標高6,450mの稜線上に達した。天候も安定し、のこされた日数も十分にあり、登頂の可能性はかなり高いようにおもわれた。

8月12日、頂上アタックのため、Ｃ３（5,800m）に滞在していた西堀、井上（山岳部ＯＢ）、伊東（探検部）の３名から連絡がとだえた。翌13日に捜索隊がＣ３にむかったが、そこには巨大なブロック雪崩の跡があり、Ｃ３は消失していた。３人の姿はどこにもみあたらなかった。

翌14日からもＣ３下部の捜索をつづけ、中国人民解放軍によるヘリコプターでの捜索もおこなわれたが、３人の姿はおろか、手がかりになるようなものは何もみつからなかった。結局、すべての捜索活動は8月17日をもってうちきられた。

帰国後、大学での合同追悼式や、それぞれの隊員の葬儀がおこなわれた。踏査の会のメンバーは、事後処理や報告書の作成などにおわれたが、それらが一段落した1990年12月24日、踏査の会は解散し、残務を探査会がひきついだ。

４．再挑戦の決意

登山隊として遭難した３人と行動を共にした田村（探検部ＯＢ）と吉見（山岳部・探検部）は、1991年春、ネパールのメラ・ピーク（6,645m）に

登頂し、トムールでの鬱憤をぶつけた。また、隊長代行として捜索活動の指揮をとった吉田は、同年夏、西堀隊長の夫人、妹らとともに、トムールのＢＣを訪れ、遭難した３人の名をきざんだレリーフをトムールのみえる大岩に設置し、冥福をいのった。

吉田が帰国してから、「もう一度トムールをやろう」といううごきが、田村、吉見とのあいだで具体化した。しかし、それ以外のメンバーのめどは、まったくたたなかった。吉田らは小人数でのアルパイン・スタイルや、中国の高所協力員をサポートとして雇う案等を検討した。

５．計画準備と組織づくり

３人は、1992年夏の実現をめざし、計画準備に着手した。周囲への参加よびかけは積極的にはおこなわなかったが、探検部の佐藤、稲田、藤本、そしてワンゲルから真庭が参加を表明し、隊員の頭数はそろった。隊長は吉田に決定した。隊員は吉見を中心に、谷川、穂高、富士山等で合宿をつんだ。

中国側との交渉は、田村が窓口となって、新疆登山協会と直接おこなった。前回のようにＣＭＡとの議定書調印といった面倒な手続きはなく、ファックスのやりとりによって計画の細部がつめられた。

前回同様、よりあい所帯の隊であるため、あらたな組織づくりの必要にせまられた。当初は前回遭難した３人の遺志をつぐ意味から、「1992横浜市立大学天山トムール峰登山隊」とするつもりであったが、大学当局の反対によって冠から大学名をはずすことになった。当局からは、隊員の経験不足と一昨年の遭難から２年しか経過していないことを理由に、計画の延期までもせまられた。

結局、「天山登攀倶楽部・トムール峰登山隊」という学外団体として計画を実行することになり、各隊員の所属団体も、表だっての後援活動はできなくなった。ワンゲルは部として反対の立場をとった。山岳部ＯＢ会、探査会も、会としての後援はできないということになった。唯一、発足間もない探検部ＯＢ会が後援団体となり、山岳部ＯＢ有志、探検部

現役部員とともに留守本部、遭難時の救援対策等をひきうけてくれることになった。個人的には、上記団体の構成員や遭難した３隊員の家族、友人等から、物心両面にわたる多大な援助をうけた。

６．隊員の脱落と出発

1992年4月、約600kgの荷物を航空便で送りだし、主要な準備をおえた。5月の連休に白馬でおこなった最後の全体合宿は、無事成功におわった。筑波大での低圧室訓練もおこない、あとは出発をまつばかりとなった。

そんなある日、計画当初から参加していた藤本が、隊からの離脱を表明した。親の猛烈な反対、大学当局の圧力、遭難の恐怖など、さまざまなプレッシャーにたえかねての決断であった。

小人数の隊であるため、藤本の離隊は戦力的におおきな痛手であったが、出発直前になっての決断に翻意もかなわないまま、のこる６人にＢＣマネージャー１人をくわえた登山隊は、6月22日、成田をとびたった。

登山隊７名と離脱した藤本(右上)。

天山とトムール峰
托木尔峰

天山山脈は，中国新疆ウイグル自治区東部のハミ北方から中央アジアのパミール高原の北まで，東西2500km，南北400kmの大山脈である。平均海抜4000mのこの山脈は，北に名馬を産してきた大草原を，南に死の砂漠タクラマカンを持ち，その中心部の中ソ国境付近には6000m以上の高峰が林立している。モンゴル語で「テングリ・オーラ(天なる山)」と呼ばれるにふさわしく，海抜3500m以上は雪と氷におおわれ，そこから流れ出る氷河は実に6900条に及ぶ。

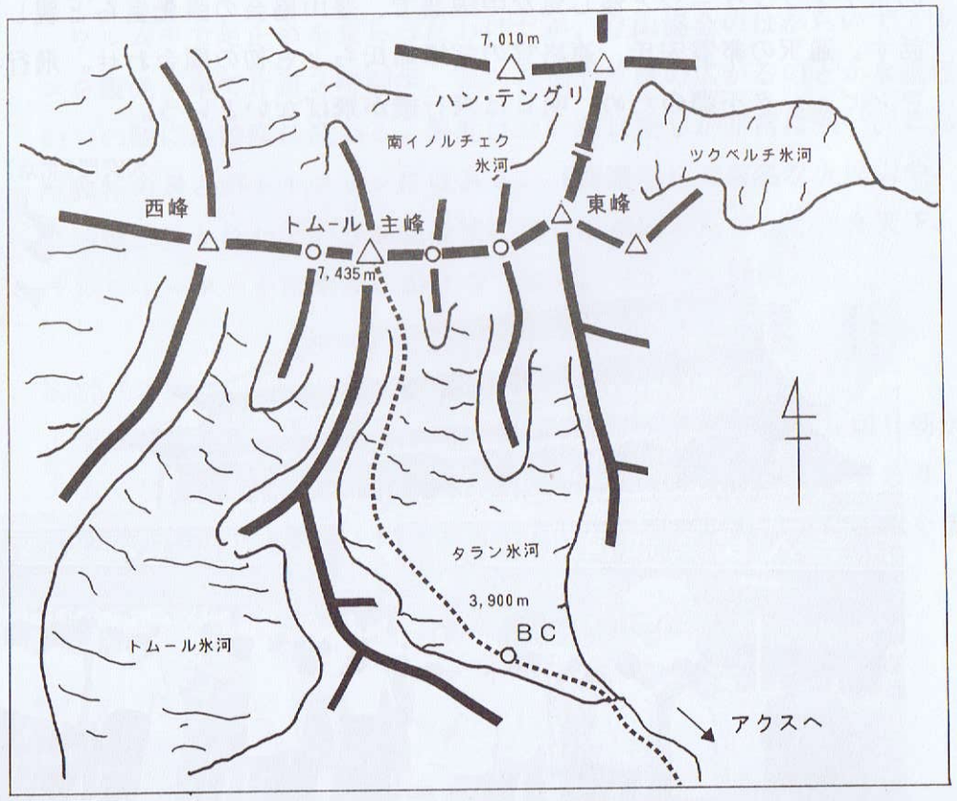
私達の目指したトムール峰は，中ソ国境の北緯42′08″，東経80′10″に位置する標高7435mの天山山脈最高峰であり，天山の氷河面積の30%に当たる氷河がここに集まっている。山名のトムールとはウイグル語で「鉄の山」という意である。

トムール峰の登山史をみると，この山の気象変化の激しさ，雪崩の多さ等，登頂の難しさを知ることができる。1937年，ハンテングリ（7010m）より高い山としてソビエト隊に発見されて以来，この山に挑んだ約300名の登山家のうち，60余名が二度と戻らぬ人となっている。トムール峰の初登頂は1956年，同峰北面のイノルチェク氷河からソ連隊が果たしており，ポベーダ（勝利の峰）と名付けた。南面の中国側からは，初登頂から遅れること約20年の1977年，中国隊が登頂したのみであり，1986年の日本女子登山隊は３度の雪崩に遭い断念している。

私達は，この２隊の記録をもとに，盟主トムールに向かったのである。

『'90・天山山脈トムール峰登山隊報告書』より

トムール峰概念図



Ⅱ．行動記録

6/22（月）　　成田→北京　　小雨

探検部員の見送りを受けつつ、搭乗する。14:55発。飛行機初体験の真庭は緊張ぎみ。薄暗い北京の空港に着いたのは18:55であった。ここで我々は時計を19:55に合わせる。最初の宿『華都飯店』は市の中心部からはなれたところにあった。早速外にでたジャーナリスト志望、現在無職の佐藤は、路上のスイカ売りのオヤジをカメラにおさめたとたん、「勝手に撮るな」と怒り狂ったオヤジに首からさげたカメラをひっぱられ、フィルムをぬきとられて真っ青になっていた。田村は、偶然仕事で北京にきていた会社の上司とホテルでばったりでくわし、「今生の別れになるかもしれない」と思った上司につけこみ、酒をごちそうになった。

6/23（火）　　北京→ウルムチ　　曇りのち雨

天安門や故宮博物館を見学。あまりの広さに途中でうんざり。ガイドにも解説を半分にしてもらい、早々に故宮を出る。18:00の便でウルムチへ。新疆登山協会の方々に歓待される。４度目の訪中を自負する吉田は、得意のボディランゲージと怪し気な中国語で、登山協会の張先生らと親しげに話す。通訳の郝震宏氏、連絡官の胡峰岭氏らとも初の顔合わせ。飛行場のコンピュータ不調のため、明日は飛行機が飛ばないという。

天安門（北京）

故宮博物館

二度目の北京へ降りたった翌日、ウルムチ行きの飛行機までには時間があるので、市内見物をすることになり、荷物をホテルに預けると、タクシーで故宮博物館へむかった。どでかい天安門をくぐって故宮の入り口に来ると、おやっと思った。入場料が40元（1元≒25円）もするのである。中国には外貨獲得のための“外国人料金”というものが存在するのだが、それにしても40元は高すぎる。

隊のなかで１番日本人らしくない顔の私が、中国人のふりをしてチケットを買おうと試みたものの、あえなく失敗。思案にくれていると、小柄な中国人のおばちゃん英語で話しかけてきた。彼女は、「私がみなさんのチケットを中国人料金で買ってあげます。私のガイドつきで全部で50元でどうですか」と言う。１人40元払って入るよりかなり安いので、彼女のお世話になることにしたのだが、この“ガイド”がくせものであった。

独学で勉強したという彼女の英語はとても上手なのだが、中国訛りというのか、中国語のイントネーションがまじっていて、非常に聞きとりにくい。しかも、彼女の声がとてもカン高いので、聞いていると疲れてしまうのである。

初めのうちこそ、みんなうなづきながら聞いていたが、そのうち全然相手にしなくなってしまった。ひたすら同じような建造物が続く故宮にも飽きてしまって、それよりもお昼に王府井で食べる予定のシャブシャブが頭にちらつきはじめ、ていねいにまわれば４時間以上かかる故宮を、わずか１時間ほどででるはめになった。

出口の近くに壺があって、みんなそれにむかってお金を投げている。ガイドのおばちゃんによると、お金が壺に入ると願いごとがかなうのだそうだ。さっそくチャレンジしてみる。「トムールの頂上へ行けますように！」と願いをこめた１分玉は、その壺のはるか上を通り抜け、見事に外れてしまった。

（吉見）

6/24（水）　　ウルムチ→トルファン　　晴れ

ウルムチで足止めを食らったわけだが、登山協会のはからいでトルファンを観光。車で片道３時間半。菜の花畑や草原の広がるのどかな景色が、いつの間にか砂漠に変わる。湿度はないが日差しが非常に強い。こんな大陸独特の暑さがトルファンにはある。『西遊記』で有名な火焔山や、漢代に城壁が築かれたという高昌故城には日陰がほとんどなく、炎天下、ミネラルウォーターを腕や頭にかけつつ歩く。トルファン泊。

6/25（木）　　トルファン→ウルムチ　　晴れ

気温40度を越えるトルファンの暑さに閉口し、観光を打ち切り朝からウルムチに戻る。午後は完全な自由時間。部屋でゴロゴロする者あり、町をふらつく者あり。夜は、出発前に協力していただいた方々に手紙を書く。

トルファン

トルファンは古くから高昌国の名で呼ばれ、シルクロードのオアシス都市として栄えた街である。

私たちが訪れた6月、日中の気温はすでに30℃を越えていた。7～8月はもっと暑いという話である。昼下がり、街に人影はまばらであった。

高昌国は、『西遊記』の三蔵法師のモデルともなった唐代の名僧、玄奘も訪れたことで知られている。玄奘の著書『大唐西域記』によると、国禁をおかしてインドへ旅立った彼は、苦しい旅の途中で高昌国に立ち寄ったのである。

当時高昌国は仏教が盛んであったが、高昌国王は玄奘の人となりをみていたく感激し、ぜひとも自分の国に留めておきたいと考えた。国王は何共玄奘に懇願したが、仏法の道を極めるためにインドへむかおうとする玄奘の意志は固かった。国王はついにあきらめ、彼を送ることにした。玄奘が出発する際、国王は今後の旅のために多くの贈り物をした。また、旅の途中、通過する国の王にむけての親書も手渡した。

「法師はわたくしの弟です。わたくしめ同様になさけをおかけください」

親書にはこう書かれていた。

しかし、国王は玄奘の帰りを待つことができなかった。シルクロードの覇権を巡って唐と争い、ついに高昌国は滅ぼされてしまうのである。玄奘が旅立ってから12年後のことであった。

－資料－『世界の歴史10「西域」』
河出書房新社

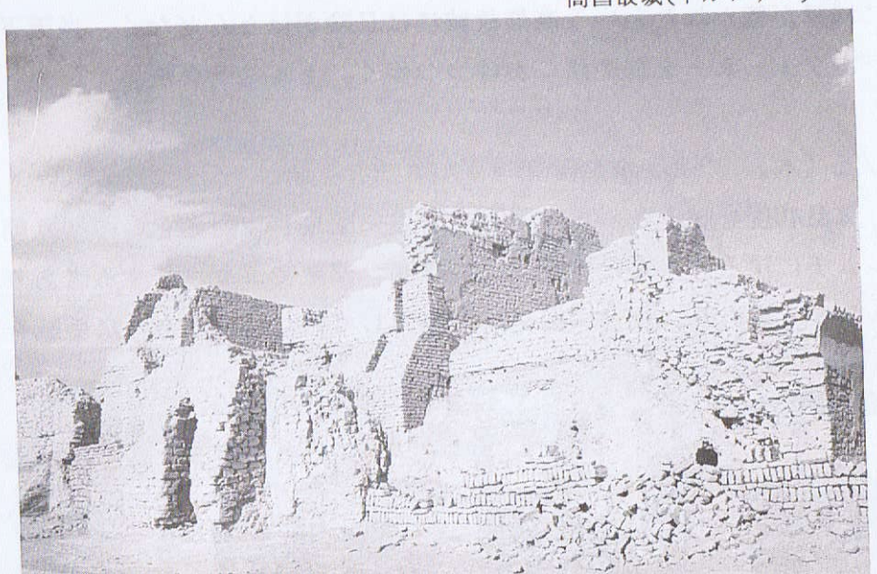
その時代の遺跡、高昌故城はいまでも残っている。照りつける太陽の下、玄奘も歩いたであろうこの街は、ひっそりと静まりかえっている。何か歴史を感じさせる遺物は、と思って探してみたが、何もみつからなかった。

日没後、トルファンの中心部を歩く。昼間とはうってかわってたくさんの人が街に繰り出して、カラオケやビリヤードに熱中していた。砂漠の街に住む知恵であろうか。

いまトルファンに暮らす人々のなかに、高昌国の末裔がいるかどうかはわからない。ただ国や王朝が変わっても、変わらずにいる人々の暮らしがそこにあるような気がした。

（真庭）

高昌故城（トルファン）



6/26（金）　ウルムチ→アクス　晴れ

ウルムチからアクスまでの飛行機は、それまでとは異なり、ソ連製小型プロペラ機であった。搭乗時にスチュワーデスから一人ずつ扇子をもらうだけのことはあって、機内はものすごく暑い。タクラマカン砂漠と天山山脈の上空を飛ぶこと約2時間、ようやくアクス入り。経度が60度ほど異なるアクスでも、サマータイム実施のため、横浜との時計上の時差は1時間である。

6/27（土）　アクス　晴れ

稲田、相木は郝氏の案内で市場へ食料の買い出し。生野菜から調味料、卵、酒、そして生きた鶏など、買うものはとにかく大量にある。稲田はほとんどジープでお留守番。しかし酒造庫に来ると突然元気になって、味見と称してはいろいろな酒に手を出していた。他の隊員は、キャラバンの準備、そして今後当分縁のなくなる郵便局へ足をむける。

6/28（日）　アクス→タカラク→2,100m　晴れのち小雨

9:00、3台のジープに分乗する。タカラクまでジープは揺れに揺れて、話すと舌を噛んでしまいそうなほど。タカラクを過ぎ、2,100mの草原へ着いたのが12:00。2,400m地点まで足をのばすはずだったが、荷物運搬トラックの到着が遅れ、ここより先に進めず。ウルムチでの2日間に加え、これで貴重な時間を3日分失ったことになる。稲田、佐藤はアクスから下痢までもってきた。この夜、早くも酒瓶が開いた。

2,100mのキャンプサイト。

6/29（月）　タカラク→2,600m　晴れ

7:00の起床時に稲田がテントから出てこない。下痢が深刻な腹痛を呼んだらしい。9:00にキャラバン開始……の予定が11:45に。これ以後のキャラバン中、出発がことごとく数時間単位で遅れるが、これはひとえに馬方の責任である。「9:00出発」は彼らにとって「9:00出発準備開始」なのである。この日、吉田隊長が最初の怒声を発した。こちらが申請した馬20頭にたいし、中国側は12頭しか用意していなかったのである。すべての荷を運搬することが不可能になったので、相当量の食料、装備を2,100mに一時置き去りにせざるをえなかった。しかしキャラバン自体は、快適なハイキングよろしくスムースにいった。稲田と佐藤が、時折下痢の落雷を受けたことを除けば……。18:50に2,600m着。

6/30（火）　2,600m→3,100m　晴れ

7:30起床。朝食準備中に、野菜のみならずピッケル、プラブーツなど登山活動当初から不可欠な装備まで2,100mに置いてきたことが判明。ここで吉田隊長２度目の怒声。馬方が荷物を積み終わるまで残って確認しなかった我々にも責任はあるが、このころから隊員と馬方の仲は険悪になる。予定は狂い、田村は通訳と馬４頭を伴って2,100mに下り、積み残しの荷をとってくることになった。残りの隊員は他の馬と3,100mへ。生まれて初めて馬に乗った田村は、2,600mから2,100mを半日で往復するという強行軍に、尻と脛をを擦りむいてしまうという悲惨さであった。

7/ 1（水）　3,100m　晴れのち曇り、夜半より雨

3,100mでメルヘンチックな草原とはお別れ。これからは荒涼としたモレーン地帯に入る。漢民族の馬方はこの先の道を知らない（昨年までのウイグル族の馬方は、モレーン上のルートを熟知していた）というので、この日はまたしても１日つぶして、ルート整備に費やす。17:00に田村らが3,100mに到着。20:00ごろからポツポツと雨が降り始めた。

7/ 2（木）　3,100m→3,700m　晴れのち雪

朝から好天だった。吉田を中心とする先発隊は、9:30に馬方隊に先行して出発。モレーンのルートをのばしながら進む。馬方隊についた稲田、田村は遅々としてすすまない馬方を叱咤して奮闘するが、先発隊との差を大きくあけ、道を誤ってしまう。しまいには、馬方がストライキを起こし、広いモレーンの中で一時は隊が４つに分断、孤立してしまうなどの混乱が起こった。19:00ごろからの冷たい雨は風雪に変わり視界は悪く、日が沈みかけると、もはやケルンを確認できるはずもなかった。このとき先頭をゆく吉田、真庭、相木の３人は、ビバークできる用意がなく、残る本隊は、トランシーバーの交信だけを頼りに、３人を追った。視界がゼロに近い風雪の中、22:30、肉声によって全員が「遭遇」できたのは奇跡におもわれた。結局、ＢＣ入りすることはできず、すっかり暗くなったモレーンに露営した。相木は体力を消耗し、寒さとだるさを訴えていた。

7/ 3（金）　3,700m→ＢＣ(3,900m)　晴れのち雨

ゆっくりと11:00ごろ起床。快晴。テントから顔を出すと、ついにトムールがその全貌を明らかにしていた。13:00、不満を言う馬方に吉田が、もう何度目だかわからない怒声で応じている。一番反抗的な馬方は、第二次大戦中に父親を日本軍に殺されたという過去の持主で、日本の戦争責任を盾に頑としていうことをきかない。しかし、こんなところでそんなことをいわれても我々の関知するところではない。水もとれないモレーンの真ん中で立ち往生するのは自殺行為であるため、無理やり馬方をおどしつけて14:50にようやく出発。遅い出発に天気もご不満らしく、この後はガスと降雪。隊員までめいめい馬を引き、17:10に3,900mのＢＣ着。降りしきる雪のなか、隊員用テント、キッチンテントなどの設営をおこなう。ＢＣ裏の大岩には、遭難した３人の名を刻んだレリーフが、一年間なにごともなかったように残されていた。

モレーン地帯

昨夜から降りつづいていた雨も上がり、3,100m地点の天場で僕らは晴天の朝を迎えた。空の色は普段見慣れた青さよりも少し濃い色合いをしていた。今日はＢＣ入りの日である。夕暮れにはＢＣに着きたいので、吉田さんら６人が先発隊となってモレーン地帯を進み、僕と田村さんが荷を積んだ馬を率いて後を追うことにした。少しでも馬がスムーズに通れるように昨日、岩だらけのモレーンに多少道らしきものを作っておいたが、先発隊がその続きをやりながら進むというので、時間的には厳しいＢＣ入りも比較的楽なように感じた。

馬方たちの作業は相変わらず遅かった。天場出発は12時となった。先発隊出発後２時間半である。

やっとモレーンの中を歩きだす。昨日作った道は遠目にはそれと判別しがたかったが、先発隊が作ったケルンがその威力を発揮し、昨日の到達点まではすんなりと進めた。

だが、ここからモレーンの様相が一変した。起伏が激しくなり、人が通れたとしても60kg近い荷を乗せた馬が進むのには難しくなった。そして、道を確認しながら進むはずが、確認しようにもケルンが見つからず、しだいに二人とも道を見失っていることに気づいた。後ろでは馬方たちが不審そうに待っている。仕方なくガレ場を強引に進ませている間、僕らは高台にたちケルンを探す。それらしきものがあったら、そこまで走って行き確認する。そんな作業を何回も繰り返してもケルンは発見されず、どうやら大きく道から外れていると知る。いくらこの辺りの日没が夜の10時頃だとはいえ、既に５時を回っている。少しでも距離を稼ごうと直線的に無理なガレ場を何回も渡らせたため、馬方たちも話が違うと騒ぎ始めた。

18時、定時交信で先発隊と連絡を取り合い、応援をよこしてもらうことにする。馬方たちはもはや、ケルンがないと動かない状態までいってしまっていた。そのため僕が馬たちよりも先に偽のケルンを積みながら応援隊との合流点まで進んだ。

やっと遠くに赤いカッパを着た吉見さんの姿が見え、彼らがいる所は割合平坦なモレーンであるので、そこまで馬たちを上げた。応援隊として来た吉見さんと佐藤さんが後発隊に加わり、先発隊は吉田さんら３人となってしまったが、彼らが作った道はその平らなモレーンのうえにあり、馬も人間も楽に進むことができた。

しかしこの頃から空が曇り、雨が降りだし、ガスも出始めた。視界は急激に悪くなった。雨の中僕らは２時間ほど、かなりよいペースで歩いたが、先発隊の三人には会うことができなかった。辺りはもう薄暗くなっていた。彼らはルート工作のため殆ど空身であり、ビバークは厳しい。僕らは定時交信以外にもトランシーバーで電波を送ってみるが、電池が切れているのだろうか、全く応答して来ない。雨が雪に変わってゆく。

雪がすべての痕跡を消してゆく。道もケルンも物音すらも。僕らよりもかなりさきを歩いていた佐藤さんが、ＢＣ手前の氷河の入り口で人影を見たと言う。その地点を目指し、佐藤さんの案内で進む。相変わらずトランシーバーに反応はない。気温も下がり、皆の疲労は目に見えてわかる。だが僕らは歩く。歩いて彼らに追いつくしかない。日は既に沈んだ。さらに雪は降りしきり、辺りは雪そのものがもつ光りにのみ照らされ、まるで夢の中をふらふらと歩いているように僕は感じた。

氷河にたどりつき、その緩やかな傾斜を登った。誰かが吉田さんたちの名を呼び出すと、皆こらえきれなくなったのかのように声を張り上げて名前を呼び始めた。僕も彼らの名を呼んだ。一旦声に出したら止めるのが何故か恐ろしくなり、ずっと名前を呼び続けた。

遠くでかすかに声が聞こえた。僕らはさらに声を張り上げ、歩みを止めた。今度は確かに吉田さんの声だった。

（稲田）

7/ 4（土）　ＢＣ　雪

早朝から風雪で、誰一人早起きせず。一日沈殿し、キャラバンの疲れを癒す。

7/ 5（日）　ＢＣ→4,350m→ＢＣ　晴れ

いよいよ本格的に登山活動開始。6:00にＢＣを発ち、アイスフォール帯のルートを開く。両側の稜線付近では、表層雪崩が頻発。積雪をゆるさない岩場では落石がガラガラ。一昨年より入山時期を早めた分、予想より氷柱は解けておらず、思いのほか苦戦する。雪原には到底およばず、アイスフォール末端の4,350m付近までルートをのばしてＢＣへ。

7/ 6（月）　ＢＣ→4,350m→ＢＣ　晴れ

稲田、佐藤、吉田が空身でルート工作。田村、真庭、吉見は、デポ地と決定した4,350m地点まで荷上げ。日が昇ると、とたんに気温が上がり、雪の状態が悪くなる。ルート工作隊は大した成果をあげることができなかった。田村は膝の不調を訴え、途中でＢＣに下った。このころ「日焼け止め」を持参していないことが判明。これから先、強い日差しに肌を焼かれ泣く思いを強いられるのは、役割を全うしなかった医療係の藤本（日本での準備期間中に脱退）の責任である。

標高差約150mのアイスフォール。

7/ 7（火）　ＢＣ→デポ地(4,350m)　晴れ

稲田と吉田が先発し、ルートをのばす。田村はデポ地まで荷上げ。予定では、先発隊が雪原までルートをのばし、佐藤、真庭、吉見がＣ１入りするはずだった。しかし先発隊がアイスフォール帯を突破することができなかったため、予定変更。この３人はデポ地に泊り、明日に備えた。先発隊と田村は、ＢＣに下った。

7/ 8（水）　ＢＣ（晴れ）、デポ地（曇りのち晴れのち雪）

佐藤、吉見は7:30にデポ地を出発、ルート工作へ臨むが、出発してすぐに佐藤が氷を踏み抜き、水流へ落ちた。下半身ずぶ濡れとなった佐藤はデポ地に引き返し、待機していた真庭がこれに代わった。ＢＣの隊員は休養。吉見、真庭の顔は、早くも火傷の様相を呈してきた。佐藤、真庭、吉見はこの日もデポ地泊。

7/ 9（木）　ＢＣ（雨）、デポ地（雪）

6:00の時点で、降雪、視界悪し。7:00の交信で全員が行動を見合わせた。8:00の交信で、この日の停滞が決定。デポ地のエスパース２～３天は３人ではせまく、荷上げした食料も微量だった。することもない３人は、手や顔の皮を剥くことで終日を過ごした。一方ＢＣでは、盛大な夕食に酒が登場した。

7/10（金）　デポ地→雪原(4,500m)→ＢＣ　晴れ

佐藤、吉見は7:00にデポ地を発ち、アイスフォール最終部のルート工作。ＢＣでは、いつまでもてこずるアイスフォールに見切りをつけて、別のルート（1977年に中国隊が試みたルート）を検討。しかし、10:30、佐藤、吉見が雪原までのルートを開拓することにより、ＢＣの３人も16:00になってデポ地を目指した。佐藤、吉見、真庭の３人はＢＣへ下った。

アイスフォール

アイスフォールは、前回とはやや様子が異なっていた。左側は急峻で手がつけられない。真庭氏と試みた右側は、氷のカーテンにさえぎられていた。残された中央のルートもクレバスの開きが大きく、難しそうにみえたが、ここを登れなければ登山活動が中断してしまう。

冗談じゃない！こんなところで引き返せるかと、佐藤氏と再びアイスフォールへむかう。中央の右よりにルートを進める。順調だ。

全体の約半分ほど登ると、クレバスが大きく開いていたが、浅そうだから中に降りられるかもしれない。佐藤氏がトップでザイルをのばす。

突然ザイルにテンションがかかった。どうやらクレバスにはまったらしい。クレバスの恐怖を初体験した佐藤氏が顔をこわばらせて、「深く切れおちていてとても進めない」という。ここが登れないとなると、あとは複雑に入りくんだ中央ルートを登るしかない。

とても登れそうになかったが、氷柱の間を右へ左へ、なるべく浅いところをねらってすすむ。途中、垂壁のトラバースなど、きびしいピッチもあったが、しだいに傾斜もゆるくなり、ようやく雪原にたどりついた。

アイスフォールにとりついてから５日目、午後からは崩壊がはげしく行動できないこともあって、予想外に時間をくってしまった。

（吉見）

7/11（土）　デポ地→Ｃ１(4,600m)→5,000m→Ｃ１　晴れ

稲田、田村、吉田はデポ地を8:45に発ち、重い荷物に喘ぎながら10:45雪原上にＣ１（4,600m）を建設。その後、空身で5,000mのＣ２予定地まで往復する。雪原やＣ１→Ｃ２間のルートの状態は安定しており、クレバスに転落する心配もさほどなく、前半戦の遅れを一気に挽回できそうなコンディションに思えた。ＢＣの３人は、終日休養。

7/12（日）　Ｃ１→5,300m→Ｃ１　晴れ

体の不調を訴える吉田を残して、稲田、田村は9:30にＣ１を発った。２人は5,100mの田部井Ｃ２(1986年日本女子登山隊の第２キャンプ)を越え、雪壁下部(5,300m)までルートをのばしたあと、14:00頃Ｃ１に戻った。一方、ＢＣの３人は6:20にＣ１への荷上げに出発した。デポ地付近で雪崩を発見し、あわてて退避する一幕もあったが、11:40、Ｃ１に無事到着。佐藤はすっかり疲れてしまい、吉田の「田部井Ｃ２まで往復してくれば」という提案に応じる元気もなかった。この日、Ｃ１を同じ雪原上の約500mトムールよりに移動。５日ぶりに、６人がＣ１で勢揃いした。

7/13（日）　Ｃ１→5,500m→Ｃ２(5,100m)　晴れ

4:40に起床。佐藤、吉見は6:20にＣ１を出発。雪がしまっており、快適に登る。8:10、田部井Ｃ２着。9:10には前日の田村、稲田の最高到達点に達し、ここよりスタカットで登る。200mほど登ると、氷化した50mの雪壁にぶつかる。これを越えるとまた50mの雪壁があり、左から巻こうとするが、うまくいかず、佐藤が不調ということもあり、引き返した。最高到達点5,500m。14:30、田部井Ｃ２と同じ位置にＣ２（5,100m）を建設。一方真庭、吉田はデポ地の装備、食料を回収して15:20、Ｃ２入りするという強行軍にかなりつらそうである。以上４人は、この日Ｃ２泊。

稲田、田村はデポ地で別れた吉田の「卑怯もの～」という罵声を背に受け、休養のためＢＣへ下った。

7/14（月）　Ｃ２→5,800m→Ｃ１　晴れ

Ｃ２では5:00起床。夜中に雪崩の音がしたので、明るくなるまで出発を待つ。吉田、吉見は7:30に出発し、雪壁のルート工作へ。途中は一昨年と同じルートを使用。上部雪原では、落石、落氷が著しく、危険。12:10、一昨年の遭難現場である旧Ｃ３(5,800m)に到着。12:30、真横にトラバースし、上部雪原を観察したのち、13:00に下降開始。最下部の雪壁50mに

雪壁ルート工作

全ルート中最大の核心部を攀じるという喜びと、本当に稜線にでれるかという不安が交錯するなか、最低コルまで突破すべく、Ｃ２を出発する。クラストした雪面が気持ち良く、前日の到達点まで快調なペースで登る。

その上の50mの氷雪壁をシングルアックスで直上し、クレバスのギャップをいくつか越えると、200mほど緩斜面の雪壁が続いている。ここでは左の壁から氷と石が絶え間なく落ちてくるので、常に顔を上げてそれらに気をつけながら登る。

部分的に膝まで没するラッセルに喘ぎながら雪壁を登りきると、前回雪崩が三人をのみこんだ場所（5,800m地点)にたどりついた。

遭難現場の雪面はとても無表情で、何も語りかけてはくれない。遺品でもあればという期待も空しくきえた。

上部雪壁帯は前回よりは取り付きは容易だが、そのさらに上の状況はここからは確認できない。しかし午後になるとこの下の落氷石がはげしくなることが予想され、私に高度障害がでたこともあって、ここから上は後続隊にまかせ、下ることにする。

（吉見）

フィックス。17:00、Ｃ１を目前にして吉田がクレバスに足をとられ負傷。佐藤、真庭はＣ１からＣ２へ荷上げすべくＣ１に下った。ＢＣからは稲田、田村がＣ１へ荷上げ。佐藤、真庭は、ルート工作隊がＣ１に戻るのを待ってＣ２へ向かい、Ｃ２に到着したのは22:10だった。残る４人はＣ１泊。

7/15（火）　Ｃ１→Ｃ２→Ｃ１　晴れ

佐藤、真庭がＣ２より下山し、佐藤は吉見とともに吉田につきそってＢＣへ。田村、稲田、真庭の３人は、Ｃ２へあがって翌日の雪壁ルート工作にそなえる。天候はよく、目指すトムールには雲ひとつかかっていない。

ところが17:20頃、雪壁の5,800m付近からの大規模なブロック雪崩が発生する。雪崩はルート上を一気に滑り落ち、Ｃ２を襲った。Ｃ２の３人は発生直後にテントから猛ダッシュでにげだし、雪崩の直撃は免れたものの、テントは設営場所から300m以上はなれた斜面までふきとばされて、シュラフ、マット、ヤッケなどの高所装備は跡形もなく消え去っていた。

３人は雪原にうまっていた靴、アイゼン、ピッケルなど、最低限必要な装備を回収し、Ｃ１へ下る。Ｃ１では、雪崩によりアンテナを紛失したトランシーバーに針金をつけ、なんとかＢＣとの交信を成功させて、事故発生の状況と３人の無事を伝えた。

一方、負傷した吉田の足に気を配りながら下山した佐藤と吉見は、15:30にＢＣ着。19:00の定時交信でＣ２からの連絡が途絶えたことに、「雪崩」を予感した。中国側スタッフも心配するなか、20:00の交信がつながり、雪崩の発生と彼らの無事だけを確認できた。ほっとすると同時に、彼らが靴を失っていた場合を考慮して、運動靴にアイゼンをつけるなど、奇策を試みる。21:00の交信で、Ｃ１の３人が自力で下ってこれることがわかり、ＢＣにようやく落ち着きが戻った。

雪崩

Ｃ２に到着したころはまだ陽がたかく、ムシ風呂状態のテントをきらった稲田と真庭は、雪上にツェルトをはって陽よけをつくり、すずんでいた。わたしは一人、テントのなかであつさをこらえて横になっていた。Ｃ２のテントは、稜線への突破をスピーディにはかるため、一昨年にくらべて二百メートルほど上部にある雪壁基部の雪原に設営してあった。下のほうでは、あいかわらず雪崩や落石の音がひびいていたが、めざす雪壁の状態は安定しており、ここ数日間は降雪もなかった。わたしは、テントのなかで、いつしかうとうとしはじめた。

突然、稲田の発した「雪崩！」という声にねむりからさめ、テントをとびだすと、雪壁上部、ちょうど一昨年の遭難現場のあたりから、轟音とともに雪崩が落下してくる光景がとびこんでくる。高所特有のすいこまれるような藍色の空に、真っ白い雪煙のコントラストが目にやきつく。つぎの瞬間、「にげろ！」さけんだわたしは、雪壁と反対側の斜面にむかって、一目散にかけだしていた。

はしりだしてから、ツェルトでねていた真庭のことが気になり、うしろをふりむくと、雪崩がさらに勢力をまし、加速度をつけてこちらにせまってくるのがみえる。真庭の姿はすでになく、にげだしているのだろうと解釈してまたはしる。

「ドーン」という音にもう一度ふりかえると、雪崩は雪壁の基部に猛烈ないきおいでたたきつけられ、数百メートルはまいあがった雪煙がさらにわれわれにせまる。「もうだめだ」と観念したとたん、すさまじい爆風にまかれて視界がきえ、無数のブロックの破片が体にぶつかってくる。ふきとばされないように足をふんばって必死にこらえるが、呼吸ができなくなり、意識がとおざかる。

それから１分、２分も経過しただろうか、次第に風がよわまり、視界がひらけてきた。なんとかたすかったかもしれない。前方をみると、十メートルほど先に稲田がうつぶせになってたおれ、真庭はさらにその先のちいさな穴に頭をつっこんでいた。稲田がむっくりとおきあがり、意味不明の奇声を発した。真庭は放心状態で、肩でおおきく息をしている。

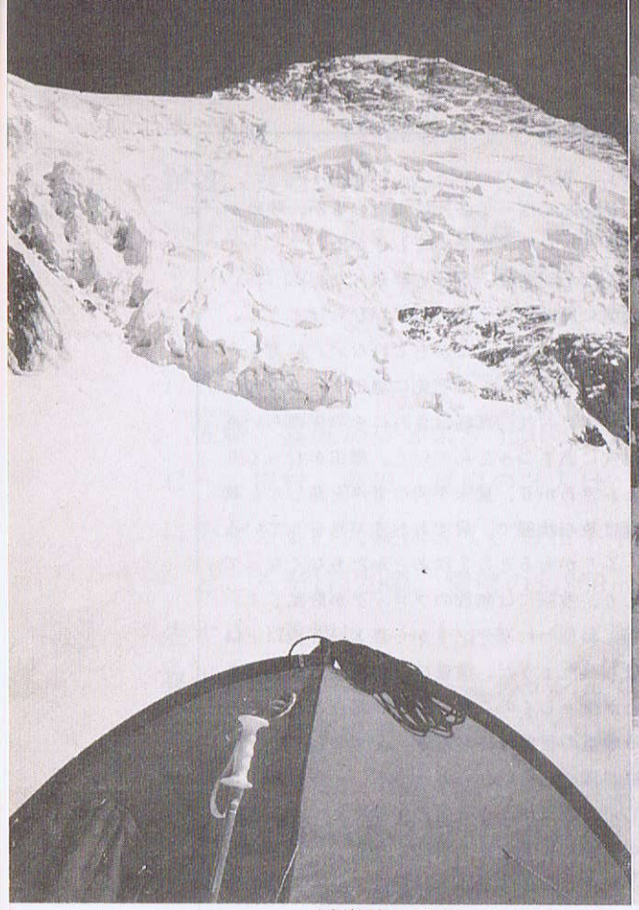
ふりかえるとＣ２はあとかたもなくなっており、雪原には無数のブロックが散乱していた。われわれはテントから百メートル以上ははしったようだ。雪壁には雪崩の通過したあとが生々しくのこり、雪崩の起点とおもわれる地点の雪壁は、おおきくえぐりとられて岩肌が露出していた。どうやら、一昨年とおなじく、好天による気温の上昇によって、雪壁が崩壊してブロック雪崩をおこしたらしい。

わたしはテントから裸足にＴシャツでかけだしたために、ブロックの破片がぶつかった手足から出血していたが、他の２人はテントシューズをはいており、たいした怪我はなかった。

稲田と真庭は、雪原上を犬のようにさがしまわり、登山靴や登攀具など、比較的おもく、とおくにとばされなかったものをほりだしてきた。わたしの靴もみつかり、とりあえず凍傷はまぬがれた。しかし、テントは回収不能な数百メートル先の斜面にひっかかっており、シュラフ、ヤッケ、マットなどは、どこまでとばされたのかわからない状態だった。

われわれは、のこった装備をＣ２にデポし、態勢をたてなおすために、一旦Ｃ１へくだった。

（田村）



雪崩前の雪壁。手前はＣ２。

雪崩後の雪壁。Ｃ２は跡形もない。

雪崩後の5,100m。雪原の穴は猛ダッシュの跡。

雪崩発生時のＢＣ

何度呼びかけただろう。19時10分を過ぎてもＣ２から応答がない。Ｃ１ならまだしも、Ｃ２は要注意地点である。Ｃ２から連絡がこないという事実に、ＢＣの空気が乱れはじめた。無線を解放し、不測の事態に備える。

20時、稲田の声がＢＣに響いた。吉田がひったくるように無線をつかむ。はたしてＣ２は、雪崩の直撃を受けていた。前線の３人は、ほうほうのていでＣ１に下ったという。Ｃ１ではまだ雪崩の余韻さめやらぬ様子で、交信はあわただしいまま終わってしまった。

ＢＣでは、３人の無事を喜ぶと同時に、この非常事態への対策を練った。

「彼らが靴を失っていた場合、我々が運動靴にアイゼンをつけ、彼らに登山靴を与えて下山させよう」

「雪崩のショックで彼らは登攀意欲を失っているにちがいない。我々３人で登ろう」

中国側スタッフとＢＣマネージャーも加えて、強気になったり弱気になったり、尋常でない夜となった。

（佐藤）

7/16（水）　Ｃ１→ＢＣ　晴れ

シュラフ、マットなしの夜をすごし、Ｃ１の３人はほとんど一睡もできなかった。凍ってカチカチになったインナーに無理やり足をつっこみ、ＢＣへ下山。ＢＣの３人は、休養。そして雪崩を受けた３人の帰りを待つ。

7/17（木）　ＢＣ　晴れ

ＢＣにて今後の登山活動について話し合いをおこなう。その結果、田村、佐藤、稲田の３人が、Ｃ２からアルパインスタイルで頂上を目指すことになった。吉田は足の負傷が思ったよりひどく、ＢＣにとどまり、高所用装備のない（雪崩により紛失し、高所装備はアタック隊の３人分しかなかった）吉見、真庭はＣ２までのサポート要員となる。なお、下山までの期限は、ＢＣ出発から１週間とした。

7/18（金）　ＢＣ→Ｃ１　曇りのち晴れ

アタック隊、サポート隊の５人はＢＣを出発し、Ｃ１へ。緊張感が切れたのか、アイスフォール帯で、真庭の疲れが目立つ。

登山活動続行

雪崩の危険を目の当りにし、主要装備の多くを失った私たちは、ＢＣの狭いテントにひしめきあった。窮屈ななか、一種ピリリとした緊張感がある。吉田隊長は自ら提案することはせず、５人の意向を順繰りに聞いていった。登山活動を続けるか否かというあまりに決定的な論点について、各人が腹蔵なく意見した。

真庭と吉見は「行かない」と表明し、佐藤、田村、稲田の３人は「行く」と言う。吉田は足の負傷からみて、戦線への復帰は絶望的だった。

それぞれの意向がでそろった時点で、吉田は上部の危険性を執拗に説いた後、３人がアルパインスタイルで再挑戦することを決めた。この決定は、前々夜の吉田の言動を知る私にとって、甚だ意外であった。あのとき吉田は隊長として、明らかに登頂断念を匂わせていたからだ。

私と吉田はＢＣで同じテントに寝起きしていた。登山続行が決定したこの夜、「本当に登りたいんじゃろうね？」と少なくとも六度、私に迫った吉田隊長の黒い顔が印象深い。

（佐藤）

7/19（土）　Ｃ１→新Ｃ２(4,900m)　曇りのち雪

アタック隊は、従来のＣ２より200mほど下に新Ｃ２を建設し、ルート上雪壁からの雪崩をさけることにした。これにより、稜線までの標高差は約1,200m、雪壁を一気に抜けるには苦しい距離である。吉見、真庭はＣ１にて停滞。午後から天候が悪化し、降雪。

7/20（日）　新Ｃ２　雪

昨夜からの降雪がつづき、アタック隊はＣ２停滞。周囲で表層雪崩が頻発し、テントの中にとじこめられた３人は意気消沈する。ＢＣと定時交信をおこなうが応答がなく、田村は激怒する。ＢＣではシュラフ、マットをアタック隊に提供し、夜は寒くて眠れない状態であったため、２人ともついうたた寝をして交信を聞きのがしたのであった。

7/21（月）　新Ｃ２→5,100m→Ｃ１　雪のち曇り

4:00起床。9:00の時点で降雪がやまず行動不能のため、登頂断念を決定。ＢＣ、Ｃ１にその旨を伝える。アタック隊３人は旧Ｃ２まであがり、デポ品の回収、写真撮影などをおこなった後、Ｃ１へ下山。午後から天気が回復し、晴れ間がのぞくものの、相変わらず雪崩は頻発し、17:30頃にはルート上雪壁からの大雪崩を確認する。

登頂断念

夜半すぎ、テントをたたく風雪の音で眼がさめる。一昨日からふりつづく雪は、やむ気配もない。朝おきて、雪がやんでなかったら撤退をきめよう。そうおもい、シュラフを頭までかぶるが、なかなかねつけない。明け方まで、まんじりとした時間をすごす。

4時、起床時間だ。あいかわらずパラパラと音がする。両脇にねている佐藤と稲田をおこし、外をみる。雪だ。一晩で、数十センチはつもっている。「9時までまって様子をみよう」わたしは、喉の奥まででかかった結論を、口にだせなかった。

Ｃ２にとじこめられたこの２日間、エスパース３人用テントの居心地は最悪だった。せまいテントのなかでは、体をおもうようにのばすこともままならない。無意識にプレッシャーからのがれようとしているのか、稲田はトドのようにひたすら惰眠をむさぼり、佐藤はむしゃむしゃとカキ氷（雪に練乳とシロップをかけたもの）をたべつづけている。

わたしは、いたずらに時間を消費していくことへのあせり、頻発する表層雪崩の恐怖、雪壁に再度とりつくことへの不安におしつぶされそうになる自分を、必死に鼓舞しつづけた。ここでひきかえすのなら、この山にかけてきた４年間はなんだったのか。

ＢＣとの交信では、吉田隊長がＣ２に停滞しつづけることの危険性について、一方的にまくしたてたあと、無線をきった。その後、Ｃ２の状況をしらせようと何度も交信をこころみるが、ＢＣからの応答はなくなった。

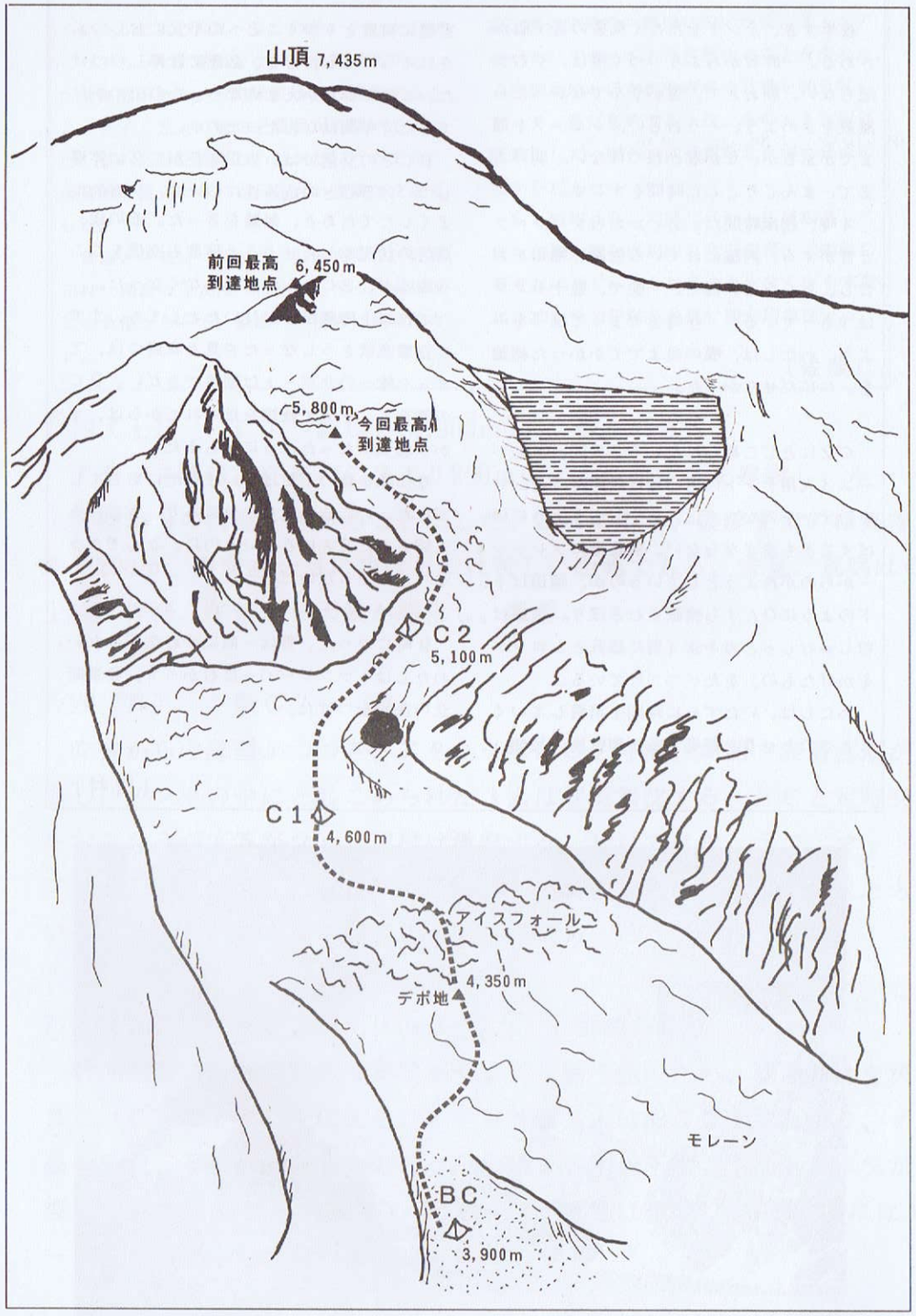
これ以上停滞がながびいたとしても、すでに登攀意欲をうしなった吉見と真庭には、アタック隊へのサポートは期待できない。ＢＣの隊長も、ケガで戦線をはなれてからは、すっかり弱気になったようにおもえた。

登山隊全体の士気は、いまや地におちてしまった。のこる日数も十分にあり、うごける人間もまだ５人いるというのに、なんでこうなってしまったのだろう。

9時になった。雪は一向にやむ気配はない。わたしはトランシーバーにむかって、登頂断念の決定をつげた。

（田村）

ルート概略図



7/22（火）　C1→BC　晴れ

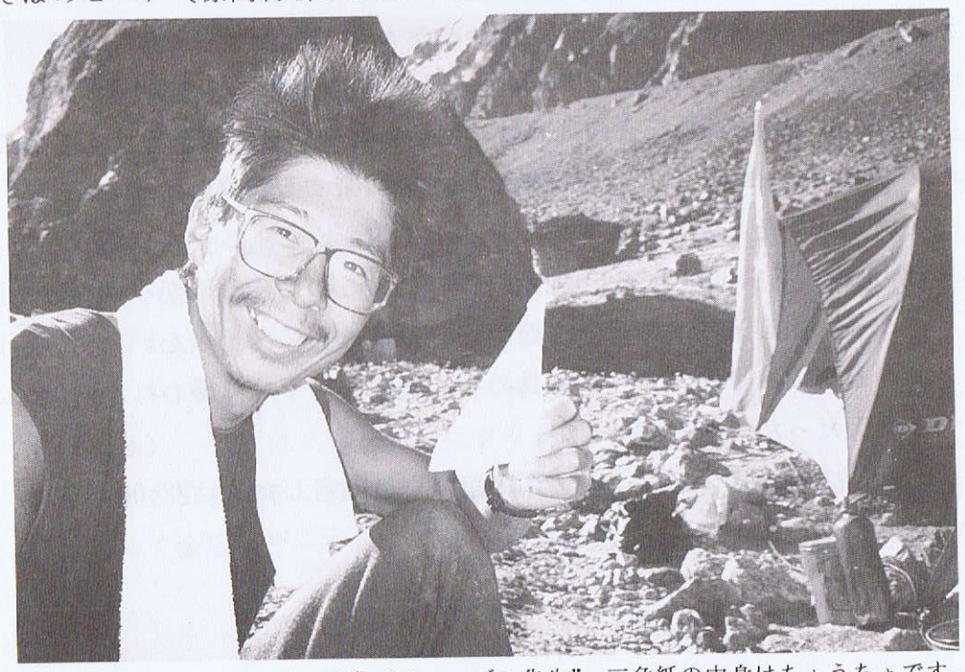
C1を撤収、もてるだけの装備をザックにつめこみBCへ下山。アイスフォール帯をすぎ、緊張感のなくなったモレーン地帯では、肩にくいこむザックの重さにあえいだ。13:00、BC着。上のキャンプでの稲田と吉見の交信（とても誌上に掲載できないようなお下劣な内容）を聞いて、怒り心頭の相木に、稲田は土下座して謝罪。

7/23（水）　BC　晴れ

馬が上がってくるのが26日になり、翌27日にBCを発つことが決定。中国側スタッフが我々の労をねぎらい、宴会を催してくれた。歌って飲んで、稲田はストックをふりかざして剣道の型までみせた。馬方のケンジはキルギス族の踊りを披露。

7/24（木）　BC　晴れ

BCにある大岩をつかって「クライミングコンペ」をやろうとするが、練習中に吉見が落ちて足首を捻挫して、あっさり中止に。もはややるべきこともなく、幻の蝶を追って奔走する者あり、押し花に熱中する者あり、そばのピーク（標高約4,300m）に登り写真を撮る者あり。



自称“ファーブル先生”。三角紙の中身はちょうちょです。

7/25（金）　ＢＣ　晴れ

ぼちぼちカートン整理を始める。暇である。

7/26（土）　ＢＣ　曇りのち雪

隊員総出でカートン整理。作業中に雪が降りはじめ、そのうち本降りに。16:00頃、馬方４人と馬が到着。彼らに馬乳酒をいただく。「貴重だ」と言われ、恐縮するが、味の方は……。

7/27（日）　ＢＣ→2,600m　晴れ

7:30には出発したかったのだが、例によって大陸的な馬方さんの準備は遅く、出発は11:20になった。大岩から落ちて足を痛めた吉見は馬にまたがってのキャラバン、吉田はスキーストックを杖がわりに、なんとか自力で歩いた。モレーンでは、トムールの山容が青空に映えてまぶしかった。

2,400m地点まで下りたかったが、モレーンのアップダウンで相木が足を痛めてしまい、おまけに、せっかく乗せてもらった馬から転げ落ちて尻をしたたかにうったことなどもあって、2,600mどまりとなる。すでに緊張感をうしなった体にこの行軍はこたえた。2,600mの草原で山羊をつぶし夕食とするが、山羊だけのおかずにちっとも満足できなかった。

7/28（月）　2,600m→2,100m→アクス　晴れ、一時小雨

10:30に出発。馬好きの真庭は、風邪を理由に念願の乗馬。まるで競馬のジョッキーのように見事な前傾姿勢で騎乗する真庭の手綱さばきは、とても病人のそれとは思えない。どんどん遠ざかるトムールはもうみえるわけもなく、16:00に2,100m地点に着いた。このころ小雨がパラつき、肌寒くなる。出迎えにきたアクス登山協会の張さんにスイカをいただき、満腹になるまでむさぼり食う。隊員の多くがのちに下痢に襲われるのは、これが原因だったのかもしれない。

ジープの故障などで、アクス賓館に全員到着したのは22:00だった。

7/29（火）　アクス　晴れ

アクス登山協会にてカートン整理をおこなう。個装もふくめて大方の荷は、船便で輸送するべくカートンにつめた。

7/30（水）　アクス　晴れ

佐藤は下痢に猛襲され、食べ物を口にすれば必ずだしてしまう状態。帰国後、彼女と海に行く約束をしている吉田は、アクス賓館の屋上で体を焼き直すことに専念する。はやくもアクス滞在にうんざりしてくる。

アクス

アクスには予想以上に滞在することになった。私にとってアクスとは、灰色の空と乾いた街並と、おいしい料理がでる場所だった。

私は本当に食っては寝て、起きては食って、アクスでの日々を過ごしていた。昼間は本を読むか、テレビでオリンピックをみるか、お昼寝をした。たまに街にでても、ぼうふらのようにフラフラと歩き、街のバザールのような通りに入り込んではリンゴやシシカバブーを食っていた。

アクスを発つとき、飛行場の建物の入り口に、積載物用の大きな重量測定器がおいてあった。「嫌だ、嫌だ」と言ったのに、無理やりそれに乗せられた。日本をでる前、64kgだった体重が、71kgになっていた。

この遠征で体重が増えた隊員は、私だけであったらしい。

（稲田）

7/31（木）　アクス　晴れ

郝氏の友人・王氏がアクス賓館を訪れる。王氏は気孔に精通していて、吉見の足や佐藤の腹を気孔によって治療してくれた。しかし佐藤の腹は完治するには至らなかった。稲田は「あんなのはインチキだ」と主張した。深夜のバザールで白酒の一気のみを繰り返していた田村と相木は、へろへろになったところを公安に連行された。

それぞれが持参した本の「回し読み」すら終わり、ただ暇である。テレビでオリンピックを観戦するなど、だらだらと過ごす。

8/ 1（金）　アクス→クチャ→アクス　晴れ

佐藤と吉田をのぞく５人は、クチャを観光。河原の両岸にロバ車と牛車がひしめく金曜バザールは、うわさ通り圧巻であった。深刻な下痢に苦し

む真庭は、道中何度も地獄を見た。夜、吉見が発熱しダウン。深夜のオリンピック中継では、女子マラソンの一番肝心なところで画面が体操に切り替わり、結末はわからずじまいであった。

クチャ

これといってすることのないアクスでの滞在が5日間となって、暇に耐えかねた我々は、近隣の町への脱出をもくろんでいた。開放都市のなかで比較的近く、金曜日に週一度バザールがあるという理由で選ばれたのが、クチャであった。

7月31日金曜日、下山後すっかり体調を崩し、下痢に苦しむ佐藤と、帰国までに小麦色の肌に焼き上げようと余念のない吉田は、クチャ観光を辞退。残る隊員5名に通訳、アクス登山協会の張さんがつき、一行はいざクチャへ。

片道約 250kmと聞いていたので、3時間半ほどでつくだろうとたかをくくっていたが、マイクロバスは最初からゴキゲンななめときて、途中何度も止まってしまう。往路だけで約5時間。それでもクチャの町まで来てしまえば、さあバザールはどこなのかと、好奇心で浮足立ってしまう。「地球の歩き方」の案内に従って川の方へいってみると、どこからこんなに集まってきたのかと思われる程の牛と馬、そして人。川の両岸は駐車（？）場になっていたのだ。

親が商売をしている間、荷馬車の番をまかされているのか、昼間から荷台でグーグー寝ている子供あり、川で友だちと泳ぐ子供あり、はたまた、自分の顔ほどもある瓜をかかえて食べている子供あり。バザールのほうは、食料品から衣料、雑貨まで、様々なものが所せましとならべられ、色鮮やかな服装の女性たちが店を行き交う。こちらの女性は皆頭にカラフルな服装をしている。服は赤やピンク、金色といったもの、そして足には白いハイヒール。日本にいるときより目にとびこんでくる色が多いように感じられた。

5時間もかけてやってきたクチャだが、帰りのこともあって、1時間しかいられなかった。帰路は車の故障のため、往路以上に時間がかかり、アクス賓館にもどったのは夜中の1時であった。

（相木）

クチャの金曜バザール。川の両岸は“駐車場”。

8/ 2（土）　アクス→ウルムチ　晴れ

一行はようやくウルムチへ。ウルムチでは、3回忌に娘3人を連れて現地入りする予定の西堀さん（前回隊長夫人）一行と会う。夕食時には新疆登山協会主催のパーティーが催された。

8/ 3（日）　ウルムチ　晴れ

早朝より西堀さん一行は、車でアクスに向かった。往路の飛行機がとれなかったからだという。ウルムチからアクスまでは、灼熱の砂漠を丸2日間走り続けなければならない。何も知らない子供たちは、「途中にドライブインはあるの？」などと無邪気な疑問をなげかけていた。

吉田は彼女にたのまれた絨毯を購入すべく二道橋の市場で奮闘。めいめい買い物や散歩など自由な時間を過ごす。

ウルムチ

ウルムチは想像していたより、ずっと大きな街であった。なるほど、聞いてみれば 100万人もの人が住んでいるという。北京は漢民族ばかりだったが、ここはウイグル人など他民族も多くいて、エキゾチックな雰囲気がただよう。街のあちこちにある標識や看板も、よくみれば漢字とウイグル文字の両方で書かれていた。

いろいろな民族が同じ所に住んでいると、やはり民族間の対立というものは必然的に生まれてくるらしい。通訳の郝さん(漢族)など、「僕はケンカ強いよ。学生のころ、よくウイグル族を殴ったね」と私に自慢するほどである。実際に目にすることはなかったが、街ではしばしば漢族とウイグル族の衝突がおこるとのことだ。

（相木）

二道橋市場(ウルムチ)

8/ 4（月）　ウルムチ→北京　晴れ

郝・胡両氏に別れを告げ、いよいよ北京へ。吉田と佐藤は、チャイナドレスをおみやげに買い込んだ。帰ったら、それぞれ彼女に着せるのだという。それを羨ましげにみていた真庭の「俺も買って帰ろうかなぁ、♪あてもぉないのにぃ♪」という歌声がホテルに空しく響いた。

夜は登山隊のうちあげと、この日21歳の誕生日を迎えた稲田の誕生パーティーを兼ね、北京ダック屋で乾杯をした。

8/ 5（火）　北京解散　晴れ

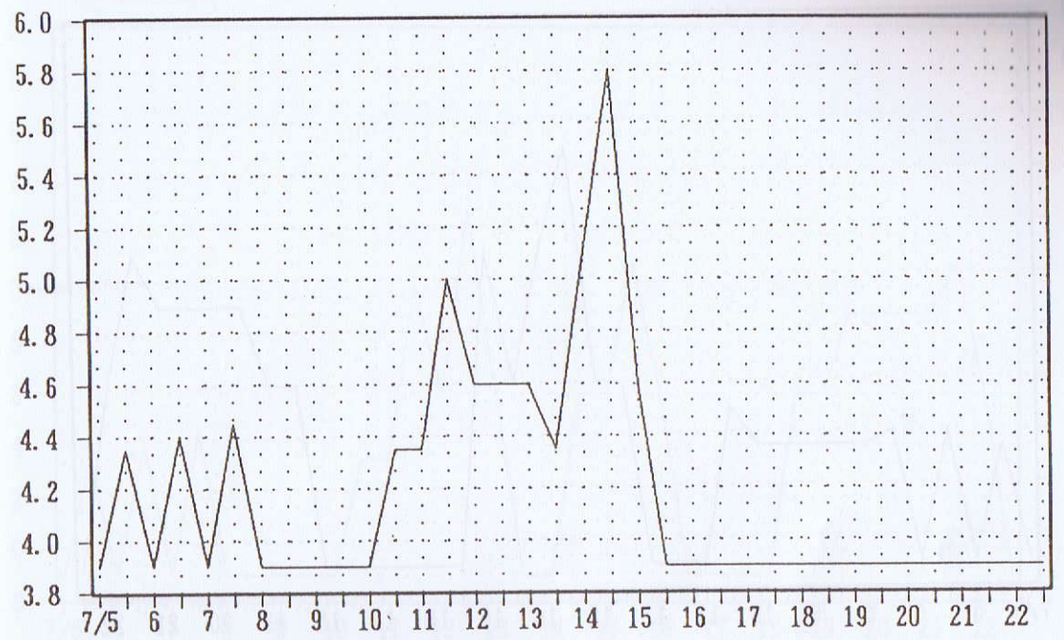
北京にて解散。吉見、稲田は個人旅行をつづけるため、ホテルに残り、他の５人は早朝の成田行きの便に乗り込む。15:00ごろ成田に到着。今野（吉田の彼女）、三浦（探検部員）に迎えられ、それぞれ家路についた。

登山隊と中国側スタッフ（ＢＣ）。

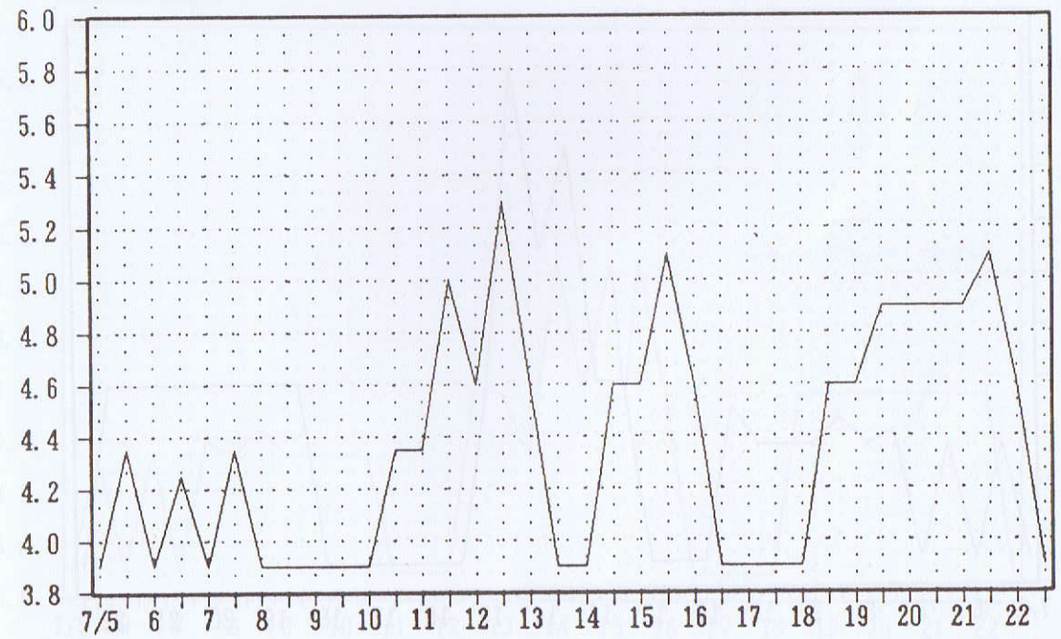
各隊員の行動表

（単位：千m）

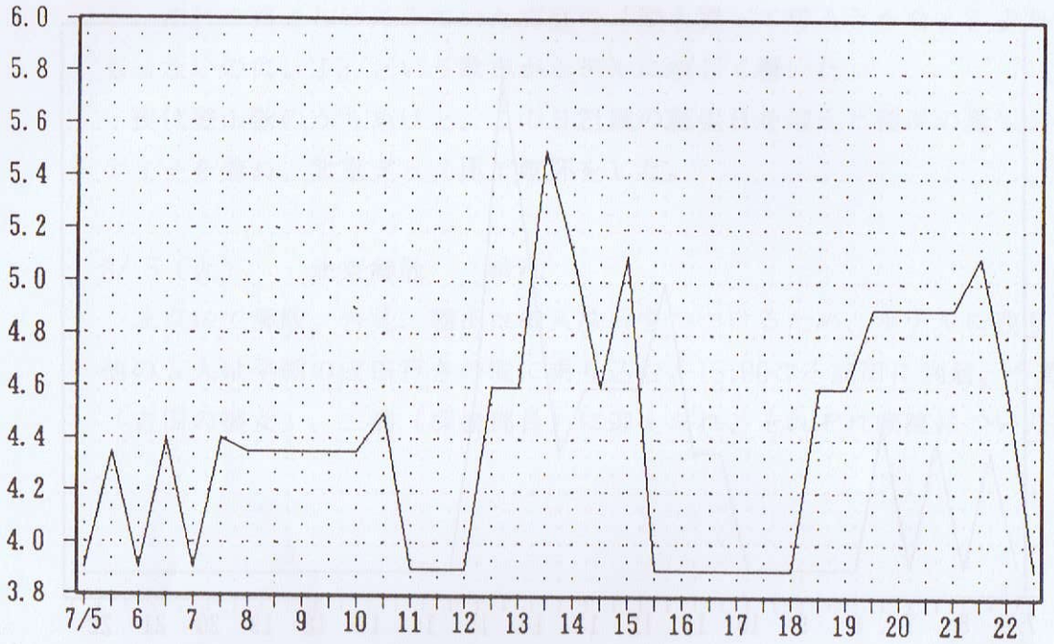
吉田宣明



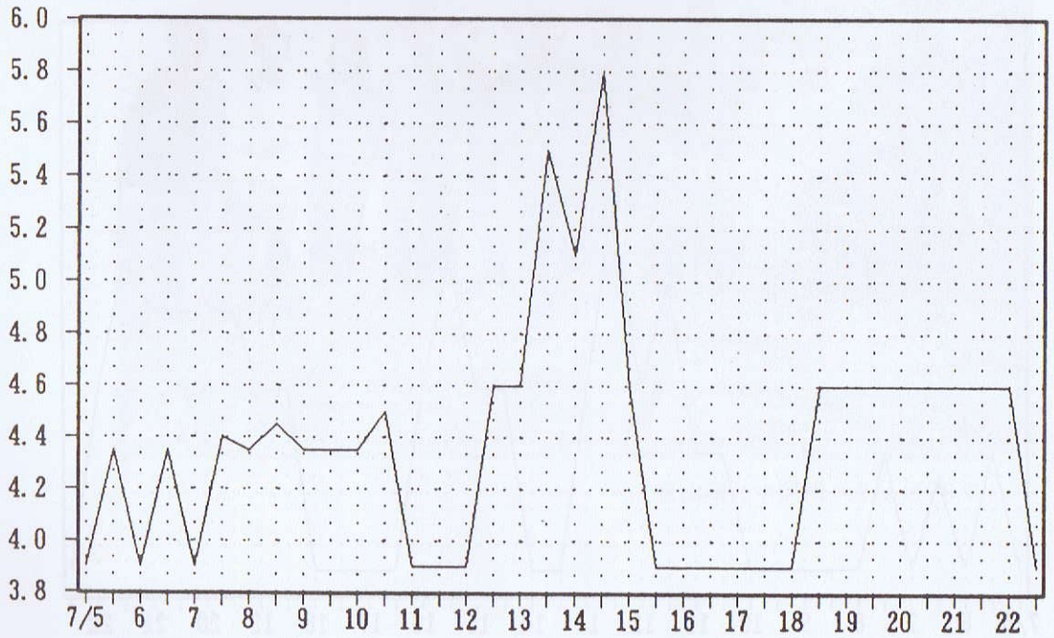
田村康一



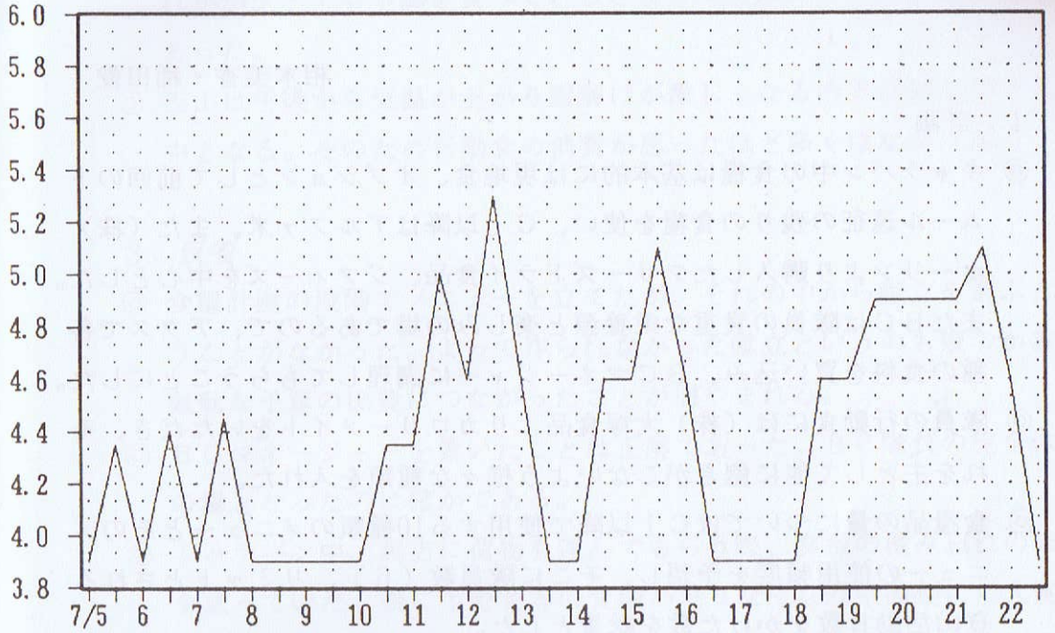
佐藤修史



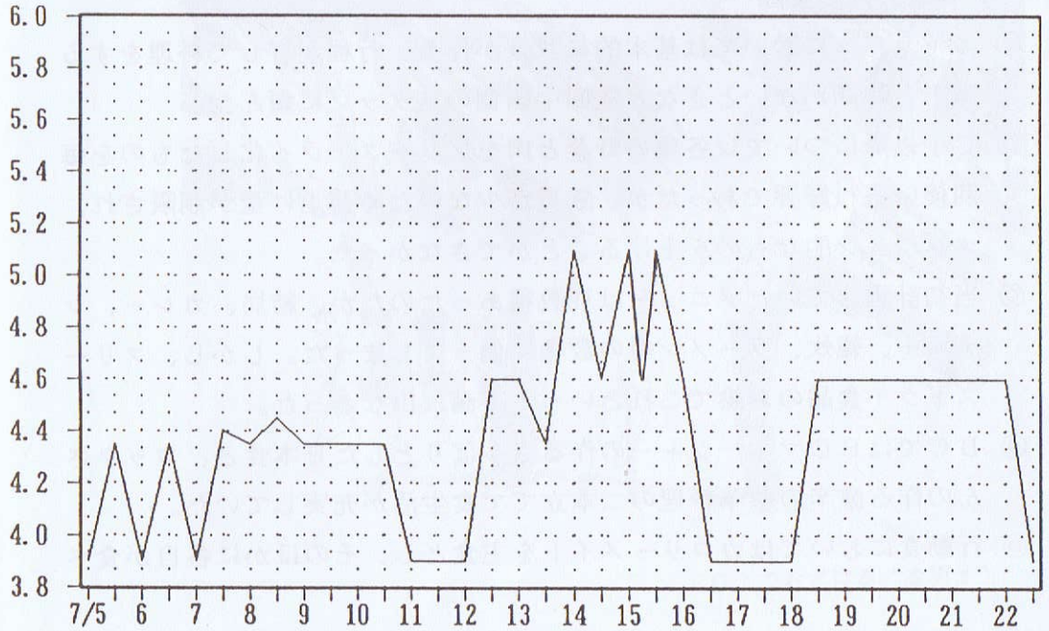
吉見敦司



稲田　俊（すぐる）



真庭博之



Ⅲ．担当報告

食糧

相木美香・稲田俊

1．計画

◎ キャラバン中の食糧は基本的には現地食、オプションとして前回のトムール遠征の残りの食糧を使い、Ｃ１以降はアルファ米、また（株）ホーリンより購入したフリーズドライ食品、ジフィーズを中心とした。またＢＣは隊員の貴重な栄養源と楽しみの場であるので、アクスで各種の食料を買い込み、ＢＣマネージャーに調理してもらうことにした。

◎ 隊員の行動食には（株）大塚食品よりカロリーメイトをいただき、それを主として他に飽きがこないよう様々な種類を入れた。

◎ 食糧品の量についてはＣ１以降で使用する10種類のメニューとそのメニューの使用頻度を予想し、そこに隊員数（６）、リミットとされる登山活動日数をかけた数を総量とした。

2．食糧計画の実際

◎ キャラバンにおいては基本的に我々が作り、行程が押して料理をする気力と時間がないときなど数回中国側のスタッフに頼んだ。

◎ Ｃ１以降については各種の野菜と肉をフリーズドライ化したものを毎回使い概ね好評であったが、隊員が少ないため荷上げ量が制限され、オプション的なものを上げることができなかった。

◎ 当初計画していたメニューは10数種あったのだが、結局、カレー、シチュー、雑炊、ラーメン等の数種に偏ってしまった。しかし、フリーズドライ食品のお陰でこれといった不満は出なかった。

◎ ＢＣではＢＣマネージャーの作るさっぱりとした日本食と、コックさんの作る激辛の中華料理の二本立てで食生活が充実していた。

◎ 行動食においてはカロリーメイトを主食とし、そのほかに各自が食べたいものを行動食のボックスの中から持って行くことになっていたが、そのことがうまく伝わらず、カロリーメイトだけを食べていた人もいた。おかげでＢＣには多数のクッキーやあられなどが残り、たまにだれかがケーキや羊羹を食べているとまるで兄弟ゲンカのようにねたみあった。

◎ 天山は午後から気温が上がり雪解けが激しくなるので行動時間は午前中となる。そのため行動食の消費が思ったほど多くはなかった。

3．反省

◎ 食糧計画の段階でメニューを立てたが、それの中から献立を選ぶということがなかった。よって作られなかった献立というのも幾つかあり、無駄な予算の出費につながったことが悔やまれる。

◎ ＢＣマネージャーを置いたことは正解であった。ＢＣ隊員の完全休養の場となったのは確かである。

◎ キャラバン中、馬方に荷物を運んでもらう際、食糧の積み忘れの確認を怠っていた。後に生野菜等の食糧が足りなくなり中国側にに大変迷惑をかけた。

Ｃ１でおどける“童男子”。

食糧リスト

品　　名	数 量	使用頻度	品　　名	数 量	使用頻度
アルファ米	270コ	A	スパゲティーソース	10缶	B
ラーメン	100コ	A	スパゲティーパスタ	20袋	B
切り餅	150コ	A	そば	10袋	C
ＦＤ牛肉	20g×10	A	うどん	30袋	B
ＦＤ豚肉	30g×15	A	焼きそば	20袋	A
ＦＤ豆腐	15g×25	A	サバ缶	35コ	B
ＦＤ納豆	40g×20	A	ツナ缶	50コ	B
ＦＤネギ	10g×10	A	牛肉大和煮缶	16コ	A
ＦＤキャベツ	20g×10	A	コンビーフ缶	50コ	C
ＦＤニンジン	20g×26	A	サンマ缶	55コ	A
ＦＤタマネギ	30g×10	A	かき氷シロップ	2コ	C
ＦＤミックスベジタブル	30g×10	A	コンデンスミルク	30コ	A
ＦＤホウレン草	8g×12	A	スキムミルク	6コ	C
ＦＤ鶏卵	100g×14	A	ハチミツ	2コ	C
ジフィーズ中華	22コ	C	ホットケーキミックス	3コ	B
ジフィーズ牛	22コ	B	コーヒービン詰め	3コ	C
ジフィーズ山菜飯	32コ	C	コーヒースティック	200本	A
ジフィーズとり飯	22コ	C	ココアスティック	50本	A
ジフィーズ天	22コ	C	紅茶	30箱	A
カレールー	10コ	A	緑茶	8箱	B
クリームシチュールー	10コ	B	焙じ茶	5箱	B
ビーフシチュールー	10コ	A	梅コブ茶	3缶	A
すし太郎	10コ	C	ウーロン茶	3箱	C
マーボー豆腐の素	15コ	B	にぼし	3袋	C
マッシュポテトの素	20コ	A	醤油	3本	A
味付け海苔	5袋	B	砂糖	1kg	C
きなこ	5袋	B	味の素	4本	C

品　　名	数 量	使用頻度	品　　名	数 量	使用頻度
ミソ	1kg	A	（行動食類）		
マヨネーズ	3本	A	クッキー	6kg	B
サラダ油	2本	A	ビスケット	6kg	B
だしの素	1袋	B	クラッカー	4kg	B
鰹節パック	60袋	C	ナッツ	6kg	C
胡椒	1本	B	あられ	4kg	A
だしつゆ粉末	6袋	B	エンゼルパイ	4kg	B
ふりかけ	60コ	B	バームクーヘン	3kg	B
お茶漬けの素	30コ	C	ようかん	2kg	B
ゆかり	5袋	C	魚肉ソーセージ	4kg	B
プリンの素	6袋	A	サラミ	1kg	C
カップゼリーの素	6袋	A	チョコレート	10kg	B
おむすびの素	10袋	C	アメ	2kg	B
即席みそ汁（生タイプ）	100コ	A	甘納豆	2kg	C
（粉末タイプ）	180コ	A	チーズ	2kg	B
ごはんですよ	2コ	A	干しぶどう	2kg	C
紅鮭ビン詰	3コ	A	カロリーメイト	300コ	A
おすいもの	50コ	B	（現地購入品）		
インスタントスープ	200コ	A	ワイン	5本	A
乾燥わかめ	5袋	B	米	60kg	C
バター	4箱	C	タマネギ	10kg	A
コンソメ	50個	C	ジャガイモ	10kg	C
スティックシュガー	1500本	A	ニンジン	5kg	A
あじ塩	10袋	A	鶏卵	5kg	A
ＦＤひじき	50g×3	A	果物	10kg	A
ＦＤおから	60g×3	A	ニワトリ	3羽	B
ＦＤきんぴらごぼう	40g×3	A	ヤギ	1頭	A

装備

吉見　敦司

1．反省

前回の経験から必要な装備とその数量が把握できていたので、過不足はほぼなかったと思う。現地購入した竹ざおはあまり氷に刺さらなかった。ガソリンも現地で調達した。あまり質がよくないというのでコンロにつまらないか心配だったが、ホエブスは快調に炎を出していた。中国製のライターはガスがすぐ抜けて全然使いものにならなかった。

共同装備リスト

品　　名	規　　格	数量	備　考
テント	ダンロップ　４人用	3	
	エスパース　ジャンボ	1	
	4～5人用	1	
	2～3人用	3	一張りは予備
ツエルト		2	アクスで購入
テントマット	3 m²	8	
テントリペアキット		4	
スコップ		2	
スキーストック		2	
背負子		6	
ＥＰＩコンロヘッド	ＢＰＳＡ	2	
	ＢＰＳ	3	
ＥＰＩパワーブースター		1	
ＥＰＩガスカートリッジ		１３０	
ライター		１０	アクスで購入
缶メタ	小	6	
ローソク	M	２５	

品　　名	規　　格	数量	備　考
ガスコンロ	ホエブス６２５	2	
スイスメタ	２０コ入り	１２	ＢＣ用
シグボトル		2	
クライミングロープ	８ｍｍ×１００ｍ	3	Ｆｉｘ用
	７ｍｍ×８０ｍ	3	
	７ｍｍ×５０ｍ	5	
	５ｍｍ×５０ｍ	1	
	４ｍｍ×５０ｍ	1	シュリンゲ用
アイスバイル		6	
アイスハーケン	L	6	
	M	１３	
	S	5	
ロックハーケン		１０	
スノーバー	L	１１	
	M	１７	
ユマール		6	
カラビナ		２０	
竹竿		３０	アクスで購入
トランシーバー		4	
高度計		1	
湿度計		3	
双眼鏡		1	
コッヘル	L	2	
	M	2	
ＥＰＩランタン		2	
ＥＰＩランタンマントル		１０	
ビニールシート		1	

品　　名	規　　格	数量	備　　考
ビニール袋	L（４０枚入り）	1	不足
	M（４０枚入り）	2	
	S（２０枚入り）	4	
ガムテープ		5	不足
ポリタンク	5ℓ	2	
焼き網		1	
圧力釜		1	使用せず
サランラップ		1	
アルミホイル		1	
スポンジ		1	
洗濯用セッケン		1	アクスで購入
トイレットペーパー		５０	〃
洗濯ばさみ		５０	
ビニールロープ		1	
針金	２０m	1	
ラジオペンチ		1	
六角レンチ		1	
マジックインキ		5	
割り箸		２０	
裁縫用具		1	
ボールペン		5	
はさみ		1	
輪ゴム		1	
たわし		5	
鉛筆		１０	
メモ用紙		1	
まな板		1	

品　　名	規　　格	数量	備　　考
ふきん		1	
包丁		1	
シャンプー		1	アクスで購入
セッケン		2	〃
ＢＣ用サンダル		3	〃
ガソリン		４０ℓ	〃
ハイピーシート		2	
アルカリ電池		５００	
金やすり		1	

雪壁(5,500m)で交信する吉見。

輸送

佐藤修史・田村康一

1．国内での準備

輸送を担当したわたしが実際にその任務に着手したのは、1992年３月になってすぐのことである。もうすこし早くからうごくことも可能ではあった。この時期になったのは、装備・食料など運搬する品の総量やそれを詰めるカートン、ダンボールの調整に時間を要したためである。とはいうものの、６月末に輸送を完了することをおもえば、すこしおそすぎたかもしれない。

当初から輸送の費用をおさえたい意向があったため、可能ならば安い船便を利用したかった。３月５日、わたしはまず、日本通運、ヤマト運輸、西濃の３社に電話で問い合わせた。日通では「中国課」が、ヤマトではその子会社『ヤマトＵＰＳ』が、西濃では同じく子会社『西濃コスモ』が、それぞれ相談に応じてくれた。その結果、船便を利用した場合、ヤマト、西濃では中国の港までは輸送できても、中国内の陸送が準備できる確信がもてなかった。日通では、一昨年時に担当してくれた引野氏が考慮してくれたが、結果は、時間的制約に応じることができないということだった。

たしかに船便のほうが安いにはかわりないのだが、時間がない。しかし今回のわたしたちの荷の量では、空と海で、目がとびでるほどのちがいはなかった。一昨年の実績をふまえて、わたしたちは日本通運に再び依頼した。むろん空輸である。先方の担当者は中国課から、横浜にある日通航空・輸出課の永井氏にかわった。費用はキロあたり1500円で、ＥＰＩガスは危険物扱いで別送、通関手数料は15万円ということであった。

中古のプラパールと特製の二重構造のダンボールを用意し、３月28日、大学にあつまり総出で梱包作業をおこなった。この作業は翌日までかかった。そして３月31日、大学までやってきた日通のトラックに積み込み、いちおう終了するのだが、このとき、渡航する全員のパスポート全ページのコピー、航空予約券、詳細なパッキングリストを提出せねばならなかった。

（佐藤）

2．現地での輸送

日通にひきわたした荷物は、４月上旬に航空便で中国におくりだされた。総重量は 572kg、後日おくられてきた請求書は50万円弱と、最初に佐藤がきいた見積よりはかなりすくなかった。荷物は北京からウルムチの新疆登山協会へと輸送された。請求書の50万円には、中国国内での輸送料もふくまれており、ウルムチまで 100万円以上かかった前回の半分以下に、しはらいをおさえることができた。

登山隊が現地いりしたさいには、荷物はすでにアクス登山協会の倉庫に到着していた。アクスからキャラバン出発地点まではトラックで、そこからＢＣまでは馬による輸送をおこなった。しかし、トラックは悪路にタイヤをとられて到着がおくれ、馬も予定の20頭がそろわず、つみのこしをおこなうなどトラブルがつづいた。

一昨年、ウイグル族の馬方と登山協会の間で金銭面などのもめごとがあったため、今回の馬方はすべて漢民族だった。しかし、これが裏目にでた。馬方たちは経験不足のうえ、やる気もまるでなく、当初３日間を予定したキャラバンが５日もかかってしまい、日程がおおきくくるった。

下山時には漢民族の馬方はクビにして、ウイグル、キルギス族の馬方をそろえてもらい、スムースに荷物をはこびおろすことができた。

アクスにもどってから、再梱包とパッキングリストの作成をおこない、日本までの返送を新疆登山協会に依頼して、わたしたちは帰国した。しかし、帰国後半年以上たった今も、荷物はもどってこないばかりか、登山協会からはなんの連絡もないまま、今日にいたっている。

（田村）

3．おわりに

輸送については日通をはじめ、西濃、ヤマトなど、いろいろな方面から情報の提供をうけた。また、梱包用のダンボールとプラパールは、浅野段ボール株式会社と横浜山岳会の好意により、格安でゆずりうけることができた。

ご協力いただきました皆様に、この場をかりてお礼もうしあげます。ありがとうございました。

（佐藤・田村）

渉外

田村　康一

1．はじめに

遠征隊の活動には装備、食糧といった各担当の仕事のなかにも、かならず渉外的なうごきがふくまれるが、それについてはここではふれない。わたしが担当した中国への渡航と、新疆登山協会との交渉についてのみ、簡単に報告をおこなう。

2．中国への渡航

中国への渡航は前回と同様、華聯旅行社のお世話になった。同社にはそれ以外にも、北京でのホテルの手配をおねがいし、輸送コストをやすくあげるための知恵もさずかった。また、新疆登山協会との交渉窓口もひきうけていただき、言葉の不自由なわたしたちは、おおいにたすけられた。

3．新疆登山協会との交渉

今回は北京の中国登山協会をとおさず、直接新疆に連絡をとって登山許可をえたため、窓口が一本化され交渉がスムースにいった。費用的にも、北京をとおすよりやすくあがり、今後新疆ウイグル自治区内の登山をおこなうさいには、この方式がのぞましいとおもわれる。

連絡事項がある場合は、前述のように華聯旅行社の電話やファックスを利用した。華聯旅行社には、ファックスの文面を翻訳してもらうなどの面倒をかけた。

帰国してからは、私信以外の登山協会からの連絡がぷっつりととだえ、荷物返送の件でこちらが連絡しても、なんの返事もこなくなってしまった。荷物の行方もふくめて、心配している。

4．おわりに

ご協力いただきました皆様、どうもありがとうございました。

医療報告

吉田　宜明

1．出発前の準備

1カ月半におよぶ高所登山に備えるために、出発前に以下のような準備をおこなった。

①　神奈川県福祉プラザにおける健康診断。

②　筑波大学運動生理学教室における低圧室訓練。

③　富士山山頂でのステイを目的とした山行。

①では、神奈川県立がんセンターの堀井医師にお願いして、運動負荷心電図、ガス分析をおこなった。全隊員とも問題はなく、高レベルの最大酸素摂取量値(VO_2.MAX)を記録した隊員もいた。

②については、90年隊と同様に、高度6,000mに相当する低圧室での訓練を計2回おこない、低圧状態を障害なく体験することができた。

③では、頂上での宿泊を目的とした山行を、数回おこなった。

医薬品に関しては、共同薬品として1セットにまとめることとし、内服薬、塗布薬を備えた。これらの医薬品は、ほとんどが長田病院および堀井医師の好意により提供をうけたもので、薬局での購入は専ら消耗医療器具（ガーゼ等）であった。

2．登山活動中の医療

［内科系］

登山期間中、特に多かった症例は下痢である。キャラバン初日から症状を訴える隊員がでた。多くは腹痛をともない、下痢止めまたは整腸剤を服用したものの効果がみられないため、抗生剤にて症状の減退を得た。原因としては食物、水が当然考えられるが、精神的な側面も大きかったと考えられる。

高度障害に関しては、登高速度の遅さと、最高到達高度が5,800mと低かったために、隊員に顕著な症状はみられなかった。

［外科系］

火傷：紫外線により、隊員の顔面部皮膚へ深刻な火傷が生じた。医療係のミスにより、日焼け止めクリームが医薬箱から欠落していたのがその原因である。登攀隊員は全員が１度程度の火傷となり、濡れタオルでの患部冷却をおこない、外傷用軟膏を使用した。しかし、毎日のように強烈な紫外線を浴び、Ｉ隊員は火傷２度への進行がみられた。水泡に対しては、滅菌ガーゼにて清潔さを保ち、破裂後の皮膚症状が落ち着いたころ、抗生剤入軟膏を患部に塗布し、約１週間で治癒に至る。

腓腹筋損傷：クレバスへの転落によるもので、ハップ剤とテーピング、それに漢方薬（効能等不明）の服用による治療をおこなった。当初打撲と考えていたが、１週間以上にわたる歩行困難などの症状からみて、腱の損傷が疑われた。安静２週間にて概ね治った。

足関節捻挫：転倒によるもので、ハップ剤とテーピングによる治療をおこなった。１週間ほどで治癒した。

３．まとめ

本登山隊は高所登山経験が少ないこと、年齢が全員20代と若いことが特徴である。高度順応、体持久力といった遠征に必要不可欠な要素で、誰でも多少なりとも障害が生じるものに関しては、比較的順調で、さして問題にならなかった。

医師不在の隊であるために、内服薬の用法に症状とのミスマッチや数量の不適当さがあったのも否定し得ない。準備の面では、有害紫外線から皮膚を保護するための日焼け止めクリームを医療装備に入れ忘れたことが、火傷という深刻な問題を引き起こしてしまった。

反省すべき点は少なくなかったが、大きなトラブルは最小限回避できた。今後の国内外における登山活動の医療面に、有用な経験であったと思う。

会計

吉田　宣明

本隊は参加隊員の年齢が若く、学生中心の登山隊であるため、その経済力の弱さにより、計画当初から隊予算の綿密な計画を、準備段階における最重要項目と考えていた。

１．収入の部

予算の計画段階において、総予算を800万円と見積もり、隊員の個人負担金および各方面よりの寄付金によってまかなうこととした。募金は、山岳部、探検部の各ＯＢ会および探査会、それに大学の教職員の方々を中心におこなった。その結果、全収入の三分の一にあたる200万円以上もの寄付を集めることができた。

２．支出の部

装備・食糧は、90年隊の残りや寄贈物品を可能な限り活用し、低出費に抑えることができた。また、日用品を現地購入としたため、輸送費の節約にもつながった。最大の支出は、新疆登山協会への払い込みだったが、これは当初計上していた金額内におさえることができた。

３．まとめ

隊荷返送費および報告書作成費は未だ予算の段階ではあるが、総支出額は約630万円となった。中国の７千ｍ峰への遠征としては、この程度の支出はやむをえないことであろう。

収入面での危惧が多い隊ではあったが、寄付金の200万円がその弱点を大きく助けてくれた。寄付ならびに、物品を寄贈してくださった多くの方々に、改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。

会計収支内訳

（単位：千円　以下四捨五入）

1．収入の部

項　　目	金額	備　　考
隊員個人負担金	4,300	社会人 1,000　学生 500
探検部ＯＢ会・探査会寄付金	382	
山岳部ＯＢ会寄付金	1,230	
その他寄付金	459	教職員、一般OB、その他
合　　計	6,371	

2．支出の部

項　　目	金額	備　　考
（国内支出）		
登山装備費	564	
食糧費	360	
梱包・輸送費（横浜→ウルムチ）	580	
（ウルムチ→横浜）	220	
渡航費（東京⇔北京）	1,260	
通信費等雑費	70	
報告書作成・発送費	400	
小　　計	3,454	
（中国支出）		
新疆登山協会支払い	2,747	（1元≒24.3円）
アクス登山協会支払い	33	（1＄≒131.85円）
都市滞在経費	100	昼食代、空港使用料等
現地購入雑費	37	日用品
小　　計	2,917	
合　　計	6,371	

Ⅳ．隊員エッセイ

ショート・エッセイ６編

真庭　博之

「童男子と女」

「童男子：トンナンジー」と読む。登山活動中一番の流行語であった。まだまだ思慮の足りない若者を指し、一般的には「○貞」の事を意味する。活動中では主に○○君を指す言葉として使用された。

一方では非常に身持ちの堅い女性がいた。彼女は過去に一度だけ自国の男性に体を許してしまったが、それからは断固とした態度で近づく男どもを遠ざけてきた。貞操観念にまだ強固たる中国女性の鏡と言うべきだろうか。

「童男子」を含む我々登山隊は一カ月にわたってしつこくこの女性にアタックし続けた。そして、ようやく彼女の肩に触れるところまで近づいたその時、・・・・。我々は彼女から猛烈な平手打ちを受けたのであった。

その瞬間、「童男子」は「チクショウー」と言った。

すごすごと引き返しながら、わたしはもう一度彼女のほうを振り向いた。彼女は相変わらず無表情だった。

「あんたなんか、およびじゃないわ」と言われているようで、少し腹が立った。

フン。今度会うときは、もう少しましな男になって来てやらあ。

「童男子」が今彼女をどう思っているか、わたしは知らない。

「子供たち」

子供達は皆かわいかった。
肩を組んでる子供たちも、
ちょっとすました女の子も、
はにかみながらこっちを見ていた男の子も、
不思議そうに僕を見つめる赤ちゃんも、

笑顔がいいよね、みんな。

「山のたたり」

帰国後10日ほどして、突然体調が悪くなった。体が重い。フラフラする。体温を測ると、40℃を越えていた。

医者に二三度通ったが、確たる病名が浮かばない。「原因不明の病気」に襲われる恐怖。

熱にうなされつつ、わたしはついに一つの結論に達した。
「これは天山のたたりである」と。

なぜ、山の怒りに触れたか？　やはり帰り際に、トムール峰に向かって拳を突き上げ、中指を立てて挑発したのがいけなかったのだろうか？

約一カ月後、病名が二転三転した後に、ある法定伝染病と結論づくまで、わたしの恐怖の日々は続いたのであった。

「食べ物」

食べてみるとなかなかおいしかった。特に山羊の骨つきスープと、うどんみたいなメンのうえに羊に肉とピーマンを炒めたのをかけて食べるやつ（現地では、これをラーメンという）がおいしかった。シシカバブーもおいしかった。

ただ油分が多すぎたのには難渋した。帰国後、初の食事は「刺し身」だった。

一本だけもって帰った「白酒（バイチュウ）」は、学祭のおりに他の大学の友人の間に振る舞われ、「史上最強の酒」としてその名を刻むことになった。

「バイト」

とにかく出発前は猛烈に働いた。深夜勤務５連チャンなんてのもあった。月に20万円ほど稼いだが、そのほとんどが遠征費用に消えていった。

その時の５連チャンよりも、今の週二日のほうが時として「疲れたな」と感じるのはなぜだろう。

「みんな」

あえて何も言いません。ありがとうございました。

クライマーになれなかった男

稲田　俊（すぐる）

再びトムールに行く、という話は一年生だったころから部の話題に時折上がっていた。俺は行かないだろうなぁ、と話が出るそのたびそのたびに思った。行きたくない、と言う積極的な否定ではなく、俺という人間が行く訳がない、という第三者のような、むしろ第四者とでも言おうか、冷ややかな方の俺が断定した結論におかしいほどすんなりと従っていた。興味がなかった。

山に行く、ということがどういうものかも知らなかったという方が合っていたかもしれない。まともな山登りをしたこともなかった。一度だけ、春の北穂高を登ったことはあった。山頂から見た、まだ雪を帯びている山々の姿は今までに見たことのない光景であった。そのときは素直に、きれいだな、と思い再び見たいと思い起こすこともあるだろうと思った。

一年の夏が過ぎ、秋が来てトムールの話は本格的に進み始めていた。別段、その冬は個人としてやりたいこともなかったので、同期の穂積と取り敢えずトムール隊の合宿には参加することになった。

トムール隊のミーティングに顔を出すようになってから、次第にその歯車に組み込まれ、回転していくようになった。色々なことを考えた末、そのようになったと思うが、その過程で考えた色々なことというのがよく思い出せない。でも、7,000mから見た景色はさぞかし素晴らしいだろうとは思った。

隊員となってから、ミーティングや係の仕事の事務処理をしている間は楽しみを感じた。しかし、訓練合宿はというとそうでもなかった。山行が楽しくないという訳でもなかった。白馬主稜や、谷川岳など今までとは違った山のおもしろさを知った山行もあった。しかし、それにあたって心が弾むような感触をもったこともなかった。このころから、山に行く、と言う行為の定義のようなものが何か一般の人とは違っているように感じてきた。

山に行くと決める。はい、ＯＫです。山頂を極めたいか。極めたいと言えば極めたいです。それにこしたことはありません。山歩きはつまらないか。いいえ。楽しいことはないですが、これはこれで楽しむこともできそうだと思います。今日は天候が悪いが日程上停滞できない。かと言って行動できない程ではないので行くぞ。はぁ、わかりました。

根性の問題かな、と時たま思うが本人はちょと違うと思っていた。山には山でしか知ることのできないものがあり、トムールにはトムールでしか知ることのできないことがある、と大義名分を掲げたまま日本を出た。

山に入ってからはそんな事はどこかに吹っ飛んだ。初めて見る氷河と日本でしていた想像よりも遥かにスケールの大きな山々の中で、その迫力に圧倒されながらただ黙々と行動していた。そして雪崩が起こった。

雪崩の後、再挑戦を希望したのは見栄であると言ってもよい。その見栄とは隊の人、気持ちよく送り出してくれた知人、親、そしてトムールに対する見栄である。見栄で命を懸けたため、実際雪壁の前に立ってから恐ろしさが込み上げてきた。前言撤回、と言えるものなら言いたかった。アタック隊の士気を低下させる訳にもいかなかったし、何より自分の心の中に少しでもある山頂への熱情を消さないためにも、黙っていた。内心は怖くて怖くてたまらなかった。開き直っても開き直っても恐ろしかった。結局怖いという感情しか浮かばなかった自分に正直さと哀れさを感じた。

日本に帰って来てから、本で見るような一流のクライマーと呼ばれる人々に限らず、休日を惜しむ事なく山に費やしている人々を見るのが、辛い。彼らのその厳格さ、ストイシズムを神々しく感じる時さえある。別に彼らは俺に目を向けている訳ではないのに、彼らの目が俺を、甘い、と言って笑っているような気がする。お前は山にくるな、と無言で怒鳴っているかのような気がする。

今だ俺には、それを乗り越えてから生じるストイシズムのようなものは生まれてこない。

トムールへのこだわり

吉見　敦司

7月15日、C2との交信が入らない。30分後も何の応答もなく、二年前のことを思い出し、全身がこわばった。一時間後田村さんの声がトランシーバーから聞こえて来てホッとするが、なんだか声の調子がおかしい。C2で起こったことを把握すると、体中から力が抜けていった。入山以来ごまかしてきた恐怖心をごまかしきれなかった。絶対頂上にいってやる、頂上に立てるのは俺しかいない、そう自分を鼓舞し続けて来た。だが、怖いと思った。いくべきではない、そう思った。そして吉田さんに「これ以上、上にはいきません」と言った。言ってしまった。

その夜はほとんど眠れずに過ごした。これまで準備し、トレーニングして来たことが思い起こされ、いや、それよりも逃げた自分に対する情けなさでいっぱいだった。あ〜情けない！こんな情けない気持ちになったのは初めてだ。これからの自分の人生に“逃げた”ということがどう影響するだろう。「上へいく」と言った三人への負い目、そして二年前に死んだ三人への負い目は当分なくなることはない。

西堀さん、井上さん、伊東の墓標であるトムール。オレの人生をおかしな方へと狂わせてくれたトムール。そのトムールにこだわり続けて丸四年。いまだにそのこだわりは消えない。

ＢＣ日記より

相木　美香

7月17日

昨日は田村さんのいびきで気が狂いそうになった。普段ならなんとか我慢できるが、前日は1時間しか眠れなかったからさすがに参った。タオルで顔を押えて永遠の眠りについてもらおうかと30分ほど迷ったが、やったとしても最初に疑われるのは自分だからやめた。

今日は1日停滞で、昼ご飯は中国側が作ってくれた。「アッケズ（私のこと。ウイグル語で“女の子”の意味）歌を歌え」と、蒋さんと胡さんがお得意のフレーズではやしたてる。しまいにはケンジと一緒に踊りまでやらされそうになった。

この宴会の後Meetingがあって、今後のことを決めた。稲田・佐藤・田村が頂上を目指し、真庭・吉見がそれをサポートする。18日、C1まで。19日、C2。20日に第1回目の雪壁挑戦となる。田村さんはその雪壁を抜ける自信がないという。「もし抜けられたら頂上を目指しましょう」。そういうわけだ。

この後、みんなはテントでうだうだしながらお菓子でも食べていたのだろう。人が雨のなか、夕食のために野菜を切っているのに、その横で「食欲がない」とほざいていた。なんなんだ、こいつらは。夕食は、マッシュポテト、麻婆茄子、みそ汁、ご飯。麻婆茄子は受けがよく、食欲がないといっていた連中に、「おかず、残ってる？」と聞かれた。ないよ。ふんっ。

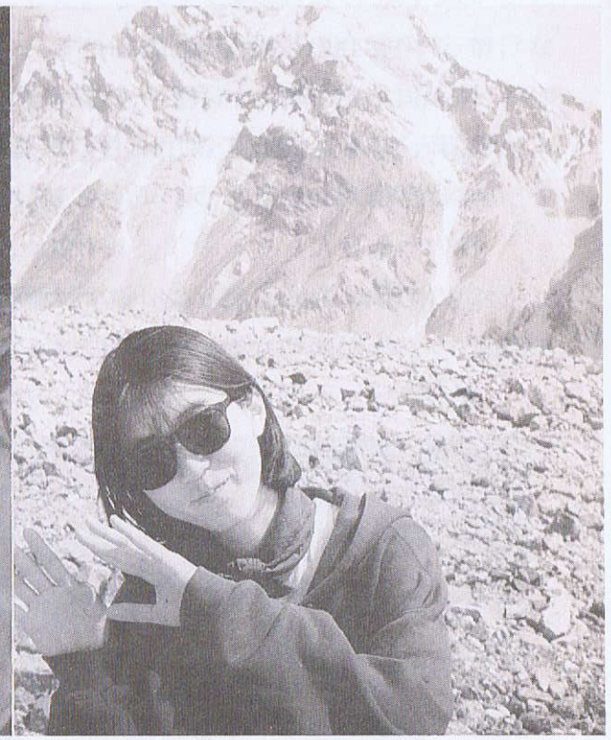
7月18日

夜は田村さんのいびきに悩まされることもなかったが、雨音が凄まじかった。あまり眠れないのも随分慣れて、それほど辛くない。朝は5時起きの予定が、天気の都合で7時になった。朝食はコンビーフ&卵入り野菜炒め、みそ汁、ご飯その他缶詰など。

隊員の洗濯ものを洗っていたら、佐藤さんのパンツが2枚でてきた。吉田さんに焼却したと伝えてくれと言ったら、交信のとき本当に伝えてくれた。みんなはどうやら本気にしているようだ。当の佐藤さんは反狂乱で、いかにあのパンツが彼にとって大切なものだったかを滔々と論じはじめ、相木をトランシーバーにだせと息巻いていた。

焼くわけがないだろうが。みんなわたしを誤解しているわ。

大切なパンツを燃やされ(?)、反狂乱で抗議する佐藤。



“犯行”を否定する相木。

「山登りと喫煙」、否「喫煙とわたし」か

佐藤　修史

山で吸うタバコはすばらしくうまい。疲れた体をザックによせて、ここちよい風に吹かれての一服。圧倒的な空間が広がり、さらにコーヒーの一杯でもあろうものなら、そこには女も芸術も言葉もいらない。そんなとき わたしは、タバコを吸わない登山家に同情する。それが長じて、日常生活では山登りを知らないタバコ愛好家をモグリとさえ思ってしまう。

ところが山のたかさがいちじるしくなると、そう呑気にかまえているわけにもいかない。タバコ吸いの登山家は、酸素希薄なる山岳とタバコの矛盾にぶつかってしまうのである。

トムールは7,435m。一般に高度6,000mで酸素の量は平地の半分になる。その高度に対応するためには酸素摂取量が豊かなほうがよいのは自明のことである。そしてその高度を目の前にして、タバコが弊害となることも自明のことである。さて、窮した。けれども今回窮したのは、わたしだけではない。隊員7名の中に喫煙者は3人いる。吉田隊長を筆頭に、吉見、そしてわたしである。

ふたをあけてみると、いちばん偉かったのは吉見であった。彼は、トムール峰登山の計画が軌道に乗ると間もなく「禁煙」を宣言し、実行した。10カ月ほどの禁煙を頑なにまもり、登山断念のその瞬間まで耐えた。タバコ常習者にしかわからぬこの偉業に、わたしはすっかり敬服するよりしかたない。どうせならそのまま一生禁煙を続けるべきだった、なんて無粋なことは言わない。

吉田隊長もある意味では（注1）偉かった。自分を知っていた。彼は決して禁煙しようとはしなかった。それどころか、成田の免税店でキャスターマイルドをまとめ買いする徹底ぶりであった。それだけではない。BCでついにタバコがきれたとき、こともあろうに隊長の立場でいながら、こともあろうに隊の装備たる電池を、こともあろうに隊員に無断で、馬方・

ケンジと交換したのである。まさに「喫煙者の鑑」といったところか。

ところが、である。そんな吉田隊長には、じつは後日談があって、彼は登山を終えて帰国するやいなや、タバコを断ったのである。結婚直前の彼女のためだと言う。雄大なトムールが、雪崩の雄叫びをもってしてもなしえなかった彼とタバコの決別を、一女性が猫なで声でやってのけた。ここでは何をいっても無粋になる。ここは皆、ただ絶句しておくべきだろう。

さて、わたしといえば、これがもっともだらしがない。記憶によれば、1991年の10月に最初の禁煙をこころみるも、半日で失敗。その後開き直って、1992年の幕開けより禁煙すると公言。ところがその年末年始は、穂高山行から稲田家訪問と二つの機会にめぐまれ、禁煙のことは忘却の彼方へ。就職試験中はふだんの1.5倍の本数を吸いつくすなど、目もあてられない。あげくには、中国大陸に降り立ったならば即禁煙などと、焼け石に水的な政策をうちだす始末。さらにこれも初日の北京で裏切り、結局のところ禁煙できたのは、7月1日から9日までの9日間であった。この禁煙期間を終えると、すっかりニコチン・ジャンキーにもどり、胡氏にいただいた巻きタバコをC2まで持参するありさま。吉田隊長が政治的に入手したタバコも頂戴し、吉見が登山終了まで大事にとっておいたピースライトもいただいてしまった。

かくして、タバコがないといかにつらいか、こんなに惨めなものかと、身を持って知るたびとなった。もう二度と「禁煙」なんて口にすまい。どうせ無職のわたしだ。せめてタバコを買うことによって、税金を払ってあげよう。そうして社会に貢献することにより、わたしも「社会人」という、なんだか偉そうな立場を自認させてもらおう。

（注1）　「ある意味では・・」と言うのは、吉田隊長の口癖である。

（注2）　長野県飯山市にある稲田の実家では、近所の沢から汲んだ水を使ってコーヒーをいれる。そのすてきにうまいコーヒーをのみながら、うまそうにハイライトをくゆらすお父さんを眼前にして、禁煙しようなんて無理な相談である。

次回遠征にむけて

田村　康一

登山活動前半、アイスフォールや雪原で、おもうように体がうごかない自分をおもいしらされ、愕然とした。前回の隊では技術や経験はともかく、隊で一番つよいのは俺だというひそかな自負があった。実際、6千メートルで高度障害がでるまでは、アイスフォールを30kgの荷をしょって往復してもしんどいとはおもわなかった。しかし、今回はたいして重量のないザックに膝がきしみ、雪原では囚人のように稲田のザイルにひっぱられた。

'90年隊の際のわたしは、無職という立場にあったこともあり、出発前の合宿にはほとんど参加していた。それ以外にも、伊東や吉見、探検部の連中などをさそって、毎週のように山行をくりかえしていた。

ところがその後、就職して社会人になったとたん、山行日数が激減した。出発前の訓練合宿にしても、満足にフル参加できたのはゴールデンウイークの白馬ぐらいで、あとは日がえりや2～3泊の山行でお茶をにごしていた。それをおぎなうために早朝や深夜はしったりはしていたが、徹夜など不規則な勤務がつづくと、それもままならなかった。

一方、吉見は大学を休学し、前回とかわらないくらいのトレーニングをつんでいるようだった。吉田はわたしに輪をかけていそがしく、年があけてからはろくに山にもいけない状態だった。しかし、おなじトレーニング不足でも、技術の裏づけがあり、本番になると不思議に力を発揮する吉田と、合宿やはしりこみなどでコンディションをつくらないとおもうようにうごけないわたしとでは、その意味あいがちがっていた。わたしはもっと自分自身をきたえあげ、力で隊をひっぱらなければならなかった。

さいわい、わたしが不調にあえいでいるあいだ、他の隊員の活躍によってルートは5,800mまでのびた。そのころにはわたしも、ようやく自分の

イメージどおりに体がうごくようになった。そろそろルートの先頭にたって、核心部の雪壁を突破してやろうという色気もでてきた。Ｃ２で雪崩にふっとばされたのは、そんな矢先だった。

雪崩の報告をうけたとき、ＢＣにいた吉田と吉見は、前回の遭難時の記憶がオーバーラップしたのか、実際に雪崩をうけた我々以上に動揺したらしい。ケガによりＢＣで指揮をとっていた吉田は、それ以後すっかり慎重になった。前半戦のポイントゲッターだった吉見は、登攀意欲をうしなってしまった。

のこされたわたしは、再挑戦を志願した佐藤と稲田とともに、Ｃ２からのアルパインスタイルで頂上をめざした。ようやく中盤にさしかかったばかりの登山活動を、一発の雪崩のために断念するわけにはいかない。我々は遭難した３人への感傷におぼれるために、ここにきたわけではないのだ。

しかし、意気ごみとはうらはらに、わたしをふくめてこのメンバーでは、“アルパインスタイル”で、雪崩でズタズタになった雪壁をこなすのは、実力的に無理があった。降雪でとじこめられたＣ２では、雪壁をまのあたりにしながら、どうすることもできない自分の無力さをおもいしらされた。

結局、天候が回復するまでＣ２でねばりつづけることもないまま、わたしは登山活動の幕をひいた。

'90年隊と同様、不完全燃焼のままトムールはおわった。ただ、前回は帰国後すぐに再挑戦をくわだてていたのに、今度はそういう心境にはなれなかった。もう二度とトムールへいくことはないとおもっていた。出発前に会社にかりた遠征費用の返済におわれながら、しばらくはなにもする気がおこらず、わたしはぐずぐずとすごした。日常の生活には、トムールにかわるような目標もはりあいもみいだせなかった。

年末に登山隊報告書の編集作業をはじめてから、すこしずつくやしさがこみあげてきた。ワープロにむかい、失敗のいい訳をならべたてる自分に腹がたった。今度こそは、失敗しても絶対いい訳のできない準備をしてトムールへいってやろう。いつのまにか、そうおもえるようになった。

年があけて、吉田と吉見もわたしとおなじ気もちでいることをしった。彼らにとって、今回の失敗はわたし以上に後悔がのこったにちがいない。２人はすでに“次回”にむけてうごきはじめていた。わたしも、いつまでもしょぼくれているわけにはいかない。

もともと、トムールは自分の積極的な意志によってはじめられた計画ではない。'90年隊におけるわたしは、天山踏査の会にかつがれた駒の一つにすぎなかった。そのころは、「中国側からの外国隊としての初登頂」という訳のわからない大義名分のもとに、組織の歯車にくみこまれていく自分への疑問を、常にかんじていた。その後、さまざまなしがらみや動機づけがくわわり、トムールへのこだわりをすてられなくなった今でも、基本的にその気もちはかわっていない。

トムールを克服できれば、遭難した３人へのうしろめたさ、そして登頂を至上目的としたストイックな遠征から解放され、本来自分がやりたかったフィールドワークや気ままな山のぼりができるようになる。学生時代からあたためてきたいくつかの計画は、この４年間先おくりになったままだ。

次回のトムールは、こうした自分らしさをとりもどすためにも、絶対に通過しなければならない儀礼である。そのために必要なのは、今回自分に不足していたクライマーとしての「つよさ」であり、遠征計画を推進していく上での「したたかさ」なのだとおもう。

遠征を終えて

吉田　宣明

うざったい６月の梅雨空の日本から、あの素晴らしいトムールの待つ中国へと私たち一行を運んでくれる飛行機のなか、隊長吉田の頭の中には、トムール峰の登頂はいうまでもなく、中国国内で起こり得るトラブルを事前に見事に回避してのけ、中国の友人たちと楽しげに談笑している私たち登山隊の姿があった。

北京につけばこちらのもの。時と場所を選ぶことを知らないあの恐ろしいポケベルもここにはなく、多くのやり残してきた仕事も、「あったかもしれない」といえる世界である。長く苦しかったウォークマンでの「中国語会話110番」のレッスン成果も、今日から発揮できるのである。

と、意気揚々の遠征スタートとなったわけだが、何故か現実とのギャップは激しい。移動には余分な日数がどんどん費やされ、動けない日の精神安定剤がわりの「観光」が加わり、そしてキャラバンではまさかのビバーク。モレーン地帯をなめているとしか思えないような馬方たちの発言と行動。日数を６月中にできるだけ稼ごうと思っていたのに、どうしてこうなるのか。昨年も一昨年もこんなことはなかった。情けない。

登山活動開始。モレーン状の氷河が白い。ゆえにクレバスがみえない。積雪20cmといったところか。両側からは轟音をともなうアイスフォール、正面には、安定しているが抜けることのできないアイスフォール。隊員にここを突破できるだけの技術が欠如しているわけではない。高度に慣れていないのか、それとも初めての氷河をみてびびっているのか。長い都市滞在と悲しみのキャラバンですでに気力が消え失せたのか。

佐藤と吉見がようやくアイスフォールをぬけてくれた。雪原は２年前と変わらない静かな広がりをもっていた。Ｃ１、Ｃ２、そして一気に問題の雪壁を突破する、はずであった。気合は各隊員ともみなぎっている。体力、スタミナも十分である。あとは高度に順応しさえすれば、スピードが生まれる。ルートを少しのばしては下りることを繰り返す。心配していた経験の少ない隊員が、だんだん頼もしくみえてきた。最初の手柄が佐藤と吉見なら、ここでは誰の手柄にもなり得そうな状態だ。

しかし吉田は、戦線離脱した退役兵と化してしまった。７月14日ＰＭ5:00ジャスト、幅数10cmのクレバスが吉田の両足をご丁寧にも交互に引きずり込んでくれたため、腱負傷、歩行不能状態に陥ってしまった。闘争心、意志、そしておそらく、世界中で最もこの山に惚れこんでいる男の１人であるはずのこの吉田を、神は登山隊長の座から、佐藤と吉見に操られるだけの猿にまで、その地位を落としめたのである。この時点での全隊員の動揺と士気の低下はいかばかりであっただろうか。

登山活動は継続され、田村率いる我らが精鋭部隊は、再びＣ２より雪壁を狙った。しかし、雪壁よりの大雪崩は彼らをキャンプもろとも吹き飛ばし、トムール登頂断念を事実上決定せざるを得なくなった。そして、雪崩後も連日のように降雪が続き、それにともなう表層雪崩も頻発して、残された僅かな可能性もついえたのである。

ＢＣを撤収するのもむなしく、何がこうさせたのかという疑問ばかりが繰り返される。力不足、無理な日程、状況判断の甘さ等、その原因を探せば全てがその通りであり、また全てがそうではなかったといえる。ただ、トムール峰は私たちにいい顔をみせてはくれなかった。今回の結果は、私たちに力を貸してくれた全ての人々の期待への裏切りとなってしまった。

私たちには、これから色々な機会があるだろう。しかし、今回の失敗は絶対に忘れてはならない。

最後に、今回ご協力いただいた皆様に、心より,お詫びとお礼を申し上げます。ありがとうございました。

協力者名簿

赤尾　英明
明田悠一郎
浅香　辰也
朝比奈大作
磯村　康博
石本　　潤
石綿　千明
伊東　和枝
伊藤　　喬
井上　恒夫
井上　敏行
今井　保弘
岩田　鎮夫
小野塚知二
内野　健太
大島　　穂
大沼　安秀
大野　正夫
大野　迪朗
岡本　久志
越智　　健
片岡　　実
片尾　周造
河合　武臣
川尻　哲夫
熊澤　　憲
桑野　　直
越野　　敏
小森　亨二

相良　美成
佐藤　　洋
里吉　昌子
庄山　高司
杉山　敏樹
鈴木　　勤
鈴木　広視
諏訪部　周
高橋　裕之
高松　康夫
田沢栄五郎
田中　弘明
田中　康之
谷島二三男
玉置　　聡
塚本　義久
土谷　恒篤
戸田　広樹
中島　　満
中西　利夫
長尾　忠之
長瀬　松男
西堀　玲子
平井　幹二
平塚　久裕
福田　博行
藤原すみ子
堀田　紘之
堀井　昌子

前田　一郎
松田　　孝
水尾　寛巳
宮崎　捷二
宮崎　忠勝
宮本　宏明
村井　龍一
森下　市朗
森下　　純
山口　幸雄
山田　　勇
山田　三仁
山森　希典
吉田　浩之
吉野　孝子
渡辺　道春
ＩＢＳ石井スポーツ
浅野段ボール（株）
（株）アルメック
医療法人社団成仁会長田病院
大塚製薬（株）
神奈川県福祉プラザ
華聯旅行社
（社）共同通信社
筑波大学運動生理学研究室
日本通運（株）横浜航空支店
（株）ホーリン
横浜山岳会
横浜市立大学探検探査の会

編集後記

私にとっては、これが初の遠征登山であった。無論、何もかもが初めて見るものばかりであり、日本で安穏に暮らす中では味わえないことを経験し、思い、考えた。

本来ならば、登頂をもってご協力いただいた方々へのお礼にかえるつもりであったのだが、残念ながらそれは果せなかった。したがってこの報告書は、私たちの栄光の記録でもなんでもない。むしろ挫折の記録である言ったほうがよい内容となっている。

そして、この挫折のなかで隊員が味わった屈辱、怒り、そして羞恥が、各隊員の立場で赤裸々に報告されている。それを記すことが、私たちの計画を温かい目で見守り、手をさしのべて下さった方々に対する義務であり、感謝の形であると私は思っている。

（稲田）

雪崩に襲撃され、登山活動を断念した我々登山隊は、帰国してからも、さまざまな試練にみまわれた。真庭は「原因不明の病気」で、２カ月以上におよぶ隔離療養生活を余儀なくされた。無職の佐藤は、遠征費その他の借金がかさんで生活ができなくなったために、現在郷里の親元に身をよせている。吉田は勤務先の贈賄事件が発覚し、春に予定していた結婚も延期になるなど、ふんだりけったりの毎日をおくっているという。

わたしはといえば、１カ月半という長期休暇のツケと、出発前に遠征費百五十万円を会社に借金したことによって、帰国後は暇も金もないみじめな生活をしいられた。報告書の編集作業もかかえこむはめとなり、部屋にこもってワープロをたたきつづける日々がつづいた。

最近になって、ようやく借金返済と報告書発行のめどもたった。気がついたらもう３月。今シーズンは一度も冬山にいかないまま、わたしは26歳の春をむかえようとしている。

（田村）

92・天山山脈トムール峰登山隊報告書
発行日・・・・1993年 3月15日
発行者・・・・天山登攀倶楽部
トムール峰登山隊
連絡先・・・・横浜市金沢区瀬戸22-2
横浜市立大学探検部
稲田　俊